魔法少女リリカルなのはStrikers―仮面の復讐者―

レア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ―仮面の復讐者―

【Ｎコード】
Ｎ５７９８Ｉ

【作者名】
レア

【あらすじ】
両親を亡くした主人公。そして、両親はある男に殺された事を知る。復讐の為に動き続ける主人公。そんな彼がようやく敵と対峙した時に……

追憶（前書き）

どうもレアと申します。

若輩者な私の作品を手に取って頂きありがとうございます。

至らぬ点はまだまだございますが、どうか生暖かい目で見守って頂ければ恐縮です。

追憶

俺は何を望んだ訳でもなく生まれてきた。

望みなんてものは生まれてから出来るものだし、望みを持つということはこの世に生まれた証。ならこの言葉には何の意味もないのだろう。

それでもそんな意味のない言葉を並べて、自分を被害者として祭り上げでもしなければ、俺は今の今まで生きこれなかったかも知れない。

きっかけは些細な事だった。

俺の生まれた家族はある一点を除けば何の変哲もない家族。――いや、今考えても本当にいい家族だったと思う。

家はそれなりに裕福。父は下手したら俺より子供っぽくて俺より馬鹿だったけど、いつも俺と遊んでくれていつも俺を見ていてくれた。母は美人で優しくて温かくて、たまに怒らせた時は無言の笑みで迫ってくる死刑執行人みたいだったが、いつも笑っていていつも叱ってくれた。

きっかけは些細な事だった。

俺が中学三年生だったころ、いつも通りに学校に行っていつも通りに部活動をして帰ってきた。夕陽が綺麗に映えていた日だった。

家に明かりが点いていない事に気付いた俺は、あぁ、また二人でどっか出かけてるのかな、とその時点では気にもしない。

けれども玄関の戸を開け、中に入った瞬間に妙な寒気を覚えた。いつの間にやら外は急激に暗くなり始め、冷たい空気が更に冷やされるように激しい夕立の音が聞こえてくる。

根拠も確信もない。漠然と温かいはずの我が家が、まるで寂れた廃墟のように感じた。いつものように綺麗に掃き掃除された玄関が嫌に不気味に見える。

もちろん何時までもそうしている訳にもいかず、恐る恐る靴を脱ぎ、暗い廊下の電気を点けた。その直後、嫌な気分は消え失せる。電気の点いた廊下は何時もの風景で、何時ものように温かい。

なんだ……結局は俺がまだ小さな子供みたいに臆病なだけじゃないか。夕立や家に誰もいない状況が、昨日家族三人で見たホラー映画

に少し似ていたから緊張してしまったのだ。

そう納得して、二人が帰ってくるまでカバンに入っている映画のＤＶＤでも見ようかとリビングに足を踏み入れた瞬間。

生暖かいナニカが俺の足を濡らした。

同時に胸に響く轟音と共に、真っ暗なリビングが真っ白な光で照らされた。

雷が轟く刹那。目にしたのは愛すべき二人の姿。

そんな二人が赤く紅く染まり、手足も胴も、何もかもがバラバラになって横たわいた。

それは疑いようもなく、誰が見ても同じように答える――

死体――だった。

涙は出なかった。俺は硬直した身体を無理に動かし、ふらふらした足取りで家の電話に向かった。

途中、ナニカが足に当たった。それでも、目は伏せなかった。直視すればもう全てが駄目になる、と当時の俺は訳が分からないなりに理解していたんだと思う。

連絡して直ぐに警察と救急隊員が来たが、案の定両親は死んでいた。その事実に俺は心の限り叫んだ。

どんな事を叫んでいたかは覚えていない。ただ、余りの錯乱ぶりに大の大人二〜三人に押さえ込まれたのは覚えている。

そうして、俺の幸せな家族生活は前触れもなく消失した。

きっかけは些細な事だった。

それから数日。警察に最後の事情聴取を受け、頭の整理も付き始めた頃。一人の女性が唐突に俺を預かると警察に訪ねてきた。

全く知らない人だった。その人は両親の知り合いらしく、俺は流されながらも結局その人に引き取られていった。

そう――これは些細な物語。

ただ、俺があの二人の息子だったと言うことだけがきっかけの――

本当に些細な物語である。

復讐（前書き）

申し訳ありません。まだ、なのはの世界に行っていません。次話でやっとです。

前置きが長いですが、取り敢えずどうぞ。

復讐

オブジェ・フラジィル。コードネーム“壊れ物”。奴はそう呼ばれていた。

奴は数年前まである組織の幹部であったが、基本的に秘匿とされている魔術に手を染め、幸運にも適正し、その組織を脱退した。

この世界には驚くべき事に魔術なんて言うオカルト現象が存在していました、なんて言うファンタジックな事実を知ったのはあの女に拾われてから直ぐの事だった。

魔術。それは人の身でありながら、その身に内包される人を越えた力。

それを扱う魔術師という肩書きは誉れ高くも何の意味もない称号だとあの女は常にぼやいていた。

魔術は有体に言えば、小説や漫画なんかで見られる炎を操って敵を吹っ飛ばすとか、架空の生物を呼び出して使役するとかそんな類の物だと理解して貰って構わないだろう。

俺は実際にそんな力の持ち主と一戦交えた事がある。あれは本当、つくづく反則だと今でも思う。

まぁそんな魔術だが、定義としては人知を越える力を持つという事である為に、その範囲は意外に広い物である。

例えば一つの武道を極め、達人と呼ばれる域にまで達した者。これも立派な魔術師である。そもそも達人等と呼ばれる人々は、その武道を嗜む者にこれ以上の高みはない。これこそがこの道の頂点だと言わしめる程の力を持つ者。

他者がこの者には適わないと思った時点で、その者は既に同じ人間として見られていないのだ。つまり、その時点で人知を越えた存在へと昇華するのである。

長々と説明したが、要はこの世界の裏にはそういう世界もあり、もちろんそれを管理する組織も悪用する組織もあり、更にそんな得体の知れない力を壊れ物が持っていると言うことである。

奴の事は多くは語りたくない。名前を聞いただけでどうにかなってしまいそうなのに、これ以上奴の詳細を俺の口から吐き出す等――軽く発狂しそうだ。

〈いやぁ、色々あったけど漸く君はその重荷を下ろせる訳だ。良かった良かった、君は復讐を遂げられ、私はこれ以上にない破格の報酬が貰える。いやぁ、こんな金ヅル逃すの勿体ないなぁ……どう？　お姉さんの身体好きにしていいからこれからも一緒にいてくんない？〉

「仮にとは言え養子縁組した息子に向かって何て台詞吐いてんだよ、あんたは」

俺はうんざりするほど広い荒野で、聞き慣れた女（ばか）の声にこれまたうんざりした声色で呟いた。

〈いやさ、養子縁組とは言っても形だけだし、何よりあの糞坊主がここまで良い男になるとは思ってなかったからさ。つー訳で結構本気だったりするかもよ？　ほら、えーと……棚から金持ちだっけ？〉

「そんな棚があったら全世界の金持ちの身が保たねぇよ」

〈じゃあ、億持ち〉

「金額の問題じゃねぇよ！　しかも、何さらっと選考基準厳しくしてんの！」

〈ほら、私ってプライドの高い女だからそれ相応の経済力が無いと……〉

「やかましいわ！」

一体何度こんなやり取りをして来たのだろう。耳に取り付けた最新の通信機器から聞こえるアイツの声は、これからやる事を考えると場違いどころか次元違いのちゃらんぽらん具合である。

まぁアイツに空気を読ませる等、吸血鬼がニンニクを食べるが如き蛮行である。それこそ命を投げ捨てる程の犠牲を払わねば成し得ない奇跡の御業だろう。とんでもない魔術だ。

〈まぁ、何にせよさ……これで君も悪戯に何かを求める必要なんてなくなる訳だ。ただ、居場所を失った力がどうなるかは目に見えてるけどね〉

俺はその言葉には答えなかった。正確には答えようとすら思わなかった。その原因は不意に感じた、しかし懐かしく慣れきった寒気のせい。

あの日と同じ。自分が臆病に思えて仕方がないあの恐怖の寒気。

〈あー、やっこさんいらっしゃったか……なら、君はもうスイッチ入っちゃってるんだよね。仕方ないなぁ……本当に世話のかかる糞ガキだ〉

アイツの声はただの音声として、まるでＢＧＭのように頭を通り抜けていく。その間に奴の影が見えた。奴の長い銀髪が風に揺れ、柳のように騒めいている。

〈じゃあ、まぁ……頑張ってね。一応死なない事を祈っといてあげるわ〉

ふとアイツがそんな事を言ったのに驚いてしまう。少し日常の顔に戻った俺の顔は間違いなく驚愕の色に染まっているに違いない。

「なに？　心配してくれてんの？」

〈バ、バカ！　あんたの為なんかじゃないわよ。ただあんたがいなくなるとお金が……そう！　新しく金ヅルを探すのが面倒くさいだけなんだからね！〉

「慣れない事するとシワが目立つようになるぞ」

〈あっはっはっ、絶対生きて帰ってこい。私が殺してやるから〉

不覚にも笑ってしまった。いや、言ってる事は物騒この上ないがアイツはこうでなくちゃ嘘だ。

「あぁ……ちゃんとぶっ殺されに行くから待ってろ」

〈……やば、やっぱりあんたいい男になったわ〉

その言葉を最後にぶつんと通信機器の音が途絶えた。アイツ……配線まるごと引き抜きやがったな。

さて、楽しいお喋りは終わった。ここからは泣く子も黙るえげつない寸劇（ショー）の始まりだ。

寒気は止まらない。手足はかじかみ、身体は芯から冷えきっていく。

しかし、それは結局の所気のせいだ。氷や水を媒介にする魔術を使う奴ならまだしも奴はそんな奴じゃない。

影が姿を現す。長い銀髪。シミ一つない真っ白なコート。凍てついた金色の瞳。間違う事はない奴だ。

俺の両親を殺した白き壊れ物。オブジェ・フラジィル。奴がそこに立っていた。

「よぉ」

俺の声に奴の眉が若干揺れた。そして、奴は口を開く。

「あぁ、久しぶりだ。直に会うのは何年ぶりだい。あれから随分経った気がするが……」

「たった三年だ。それよりさ……」

奴は笑みを浮かべ、こちらを見ている。奴は俺と話したいみたいだが、俺は生憎そうじゃない。冗談じゃない、こんな奴と話なんて虫酸が走る。

「会話は……必要か？」

だから、爆ぜた。大地を蹴り潰し、何の意味もなく、ただ愚直に奴に接近した。

戦闘の合図は正にこれだった。奴は自分の腰に手を回し、何かを引き抜くように両手を俺の頭蓋目がけて振りぬく。

俺はそんな奴の手を見ながら、懐から自分の獲物を取出し、奴の手の中の何かに思い切りぶつけた。

ガキンと鈍い音が鳴り響く。奴の手には何も見えない。ただそこには剣のような何かが存在した。少なくとも金属の棒であるのは間違いない。

そして、対する俺の手には刃渡り三十センチにも及ばない短刀。それを逆手に持ち、奴の手にある何かを受け止めている。

「くくく、はははははは！　いい！　最高だ！　君はやっぱりそうでなくては。そうでなくてはあの二人の子とは呼べない！」

「喋るな！　吐き気がするだろうが！」

俺はそのまま強引に奴の手にある獲物を振り払い、短刀を握り変え心臓目がけて突き刺しにかかる。奴はそれを半身になって躱し、空

になった右の拳を俺の顎に打ち付けた。

咄嗟の事に対応できなかった俺は顎を守る為に左腕を顎の前へ。

瞬間、まるでダンプカーが衝突したような衝撃が腕を貫く。

「――っぐ！」

呻き声を上げ、後ろに吹き飛ばされながらも、反り返る身体に抗う事なく足を伸ばす。

「ぐっ！　は――っあ……」

伸ばした足は見事に奴の顎を捉え、十分な威力で奴の頭部をかち上げる。奴は自分自身の攻撃がそのまま返ってきたような物だ。俺はガードしながらも奴に超ヘビー級のパンチを頭部周辺に食らった。それはもちろん耐えきれるような物でなく、俺はバク転するように後ろに吹き飛ばされた。

ただ、そのままじゃ終わらない。だから、俺はその威力を逆に利用してやった。吹き飛びつつある身体を目一杯伸ばし、奴の顔に足を届かせ、かち上げた。

やった事はラッキーで当たったサマーソルトキックみたいな物だ。しかし、この戦いに偶然など存在しない。奴に偶然なんて言葉は望めない。

「ちっ……たった三〜四合でもう左腕が逝ったか。本当に……」

そう言って、短刀を口に加え、顎を押さえ呻く奴に空になった右手を向ける。

「でたらめだな！　俺もお前も！」

そうして俺は自分の身体を巡っている力を呼び起こす。血潮に混じり、循環し続けるそれらを独自に張り巡らされた回路に通し、右手に集結させる。

「センディ――」

出てくる言葉は魔術の具現。自らの内包する力を放つ為の黒き撃鉄。

「――カッツァ！」

放たれるは無数の黒。何の形も保たないただの黒い球体を奴に向けて豪雨の如く叩きつける。

「カカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカ！」

奴はその雨の中、耳に障る狂った笑い声を上げた。その笑いに呼応させるように目に見えない剣を千切れんばかりに振り回す。

分かっていた事だ。奴にあんな物は通用しない。

予想していたとは言え、その黒雨は若干へこむぐらいに、情けないぐらいにあっさりと奴の剣で虫を払うが如く弾かれる。

しかし、それも分かっていた事だ。黒雨を放ち続けながらもう一つの魔術の準備を始める。

奴とはできれば長時間顔を合わせたくはない。奴は知らないが少なくとも俺はそうだ。憎むべき相手をいたぶるなんて暇があれば、俺は直ぐ様殺す。

戦いの最中ならいざ知らず、俺は元来は普通の人間性なのだ。人をなぶって喜ぶような外道では断じてない。

会話も必要ない。長い時間も必要ない。

ただ、俺は早くこの息苦しさから解放されたい。ただ、あの日から頭にこびりついて離れない暗くて、紅くて、白い光景を消してしまいたい。

ただ――大好きだった両親を殺した奴を早く殺したい。

だから――。

短刀を吐き捨て、黒雨を消した。それと同時に全速力で奴との距離を詰めにかかる。

さっさと――。

奴もほとんど同じタイミングで俺へと肉迫する。数秒も経たなかった。数秒も経たず俺達の間は手を伸ばせば届く距離まで縮まった。

それぞれ必殺の一撃を振りかぶる。

奴は不可視の剣を。俺は真っ黒にそまった自身の右腕を。

そして――

「ぶっ潰れろぉぉぉぉお！　オブジェェェェェェェェェェェェェェーー！」

「やってみろ！　ラストアンサァァァァァァァァァァァァァァ！」

空気が震えた。互いの獲物と手のひらが見えない力で拮抗し、ほとばしるエネルギーがさながら台風のように爆散し続ける。

「アアァァァァァァァァァァァァァァ！」

「カカカカカカカカカカカカカカカカカカカカ！」

狂ったように叫びながらこの身に残る力を総動員し、黒く染まった腕で押し続けた。

身体中の筋肉が限界だと軋む。心臓が胸を突き破るぐらいに大きく激しく脈動する。

口から際限なく血の味が込み上げる。思考は一切の行動を破棄し、常に頭は真っ白。

しかしその中で視界だけは、視界だけは奴の全てを認識していた。あの狂ったような笑みも、凍てついた瞳も、憎らしいその存在を全て、毛髪の一本に至るまでが強引に目に焼き付く。

「ゼアアァァァァァァァァァァァ！」

「ガアァァァアアアアアアアアアアアアアア！」

奴の顔を見て、更にギアを上げた。沸き立つ血液が皮を裂き、右腕から咲く花のように吹き出す。それでも、上げる。まだ上げる。上げて上げて上げ続ける。

何時しか真っ白だった視界は黒くなっていた。俺の手のひらと奴の剣の間にブラックホールのような懇々とした闇が渦巻いている。その渦はどんどん大きくなり、どんどん深くなっていく。

すると、視界がグラグラと縦に揺れだした。地面が低い唸り声を上げ、俺達に止めろと警告する。

止まらない。止まってやらない。俺は自分の為に生きてきた。だから、この視界が奴を捉えなくなるまで自己中にはた迷惑な道を進み続ける。

そうして何度目か分からないギアを上げた。すると、突然俺達の間に渦巻く闇が口を開いた。

「――っ！」

身の危険を感じ、奴から距離を取ろうと後ろに飛ぶ。しかし、それは叶わなかった。闇が口を開いた瞬間、強力な引力が俺の身体を襲った。

掃除機に吸われるゴミのような気分だった。抵抗する手段を思いついた時には、もう身体の半分以上が闇に飲まれている。

直感したのはもう何をしても無駄だという事。ズブズブと身体が包まれながらも既に抵抗する気は失せてしまった。

いつの間にやら奴の姿が視界から消えていた。おそらく奴は一足先

にこの闇に飲まれたのだろう。なら構わない。奴とはこの中で殺し合い（続き）が出来る。

そう考えた瞬間に、急に眠気を覚える。あぁ、いいさ。少し休憩だ。目が覚めたらまた頑張ろう。

そうして俺は瞼を落とす。そして、落ちていく微睡みの中で――

愛すべき両親と馬鹿なアイツの事を思い浮かべていた。

始まり

「次元反応？」

「はい、先ほど首都クラナガン方面で観測されたのですが、観測されてから数秒後には直ぐにロストしてしまいまして……」

とある陸士部隊の隊舎。そこで唐突にそんな報告が私の元に飛んできた。

それは私が先日この区域で起こった事件の調査の為に、この隊舎で情報を収集していた矢先の出来事だった。

「詳細な位置を教えて貰えますか？　私が直接出向いて確認して来ます。もし、次元犯罪者なら私の専門ですし、次元漂流者なら保護も出来ますから」

「い、いえ。わざわざ執務官自身が確認なんてご迷惑を押しつける訳には……」

私の申し出に目の前の局員は慌てたように取り繕う。別に迷惑でもないんだけれど……

「構いませんよ。事件の調査に協力頂いてるんですからせめてこれぐらいは」

そう言うと、目の前の局員は申し訳なさそうな顔をしながらも了承してくれた。私は次元反応があった場所のデータを受け取り、隊舎の外へ出る。

データによると、反応があった場所はここからそう遠くない。車を走らせれば五分かそこらで着くだろう。

駐車場に止めてある愛車のエンジンをかけ、不意に夜空を見上げる。空は澄み渡っていて星が綺麗に瞬いている。

「綺麗だな……」

思わず呟いて少しの間その夜空に見惚れてしまう。こんな綺麗な星空の元でまさかあんな出会いがあるなんて、私はこの時綺麗すぎる星空に感心して、感じていたかもしれない予感を逃していたのかも知れない。

「えと……この辺りのはずなんだけど」

車を走らせる事数分。目的地周辺についた私は端末を片手に辺りを見回した。

私が今いるのは首都クラナガンにあるとある繁華街――の路地裏。ここミッドチルダは魔法の発祥地と言う事から他の世界より幾分発達しているとは言え、建設的な技術はさほど他世界と変わらない。

だから、自然とこんな場所も出来てしまう。その事自体は仕方のないことだけれど、やっぱり一人の女性として路地裏なんてものにはあまりいいイメージがなかったりする。

「管理局の者です。どなたかいらっしゃいませんか？」

そんな嫌なイメージを追い払う意味も込めて、誰もいない路地で声を上げる。同時に右のポケットに入っている私のインテリジェントデバイス――バルディッシュを取り出す。

「バルディッシュ。もう一度データを見せてくれる」

〈Ｙｅｓ，ｓｉｒ〉

バルディッシュは何時ものように返事をして、隊舎で受け取ったデータを表示する。反応があったのはつい三十分前。次元反応と言っても規模としてはとても小さく、その発生時間も数十秒。

しかし、それでも次元反応が警戒すべき物である事に変わりはない。幾ら小さいからと言って野放しにする訳にはいかない。

わざわざ私が来たのはそういう危険性において、陸士部隊では対処に限界があるだろうと思い立ったのが理由の一つにあったりする。

それに今日は、不運にも局員の休暇が重なり実際に人手が足りなかったのだ。いくら上司とはいえ、あの隊舎の局員達は猫の手も借りたい状況だったに違いない。

周りを警戒しながら路地裏を進んでいく。両側が建物で挟まれているからか、普段は気にもしない自分の足音が嫌に耳に残る。

言い様のない不気味さから、人知れず右手にあるバルディッシュを強く握り締めてしまう。

〈Ａｒｅ　ｙｏｕ　ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ？　Ｓｉｒ？〉

「うん、ごめんねバルディッシュ。大丈夫だよ」

バルディッシュにまで気を使わせてしまう。本当に情けない。しっかりしなければ……

心の中でそう呟いて、私はさっきより少し力強い歩調で歩き始める。路地裏にある空調機器やごみ箱の間を丹念に調べ、異常がないか不審物はないかを確認していく。

路地を道なりに右に折れる。ここに何もなければ異常がないと報告しよう。そう思った矢先だった。

「……あれは？」

不意にごみ箱とごみ箱の間に何かが倒れていたのが目に入った。それが人だと言う事に気付いたのは、視認してから直ぐの事。

急いでその場まで走り寄り、倒れている人物を正面から確認する。

「……っっ！」

そうして思わず息を呑み、その場に立ち尽くしてしまう。

倒れていた人は私とそんなに年の変わらなさそうな男の人。それだけならまだ良かった。

息を呑んだ原因は彼の身体にあった数々の異常。

羽織っている黒いロングコートはズタズタに引き裂かれ、既にロングとは言えない長さに。

頭からは血を流し、左腕はあらぬ方向に曲がり、更には右腕全体からまるで中から腕が裂けたように無数の切り傷から血がとめどなく溢れていた。

直ぐにバルディッシュの通信機能を使い、陸士隊舎に報告と緊急医療班を手配させる。

手配が終わった後、応急措置の為に脈を測る。

（……生きてる）

そうして純粋に彼が生きている事に驚いた。こんな怪我はかなりの重症だ。それでもこの人は生きている。

そんな驚きがあったからか、落ち着いて彼を観察する余裕が出来る。

黒い髪に全身真っ黒な服装。まるでクロノのようだと心ながらに思う。

静かに眠るその顔は、静観で落ち着いた雰囲気ながらも何処か触れば壊れそうな儚さを持っていた。

そして――

「……涙？」

彼の頬には一筋の涙が流れていた。それがどんな感情から来る物なのかは分からない。けれど……

「……大丈夫。……大丈夫だから」

自然と彼の身体を抱き締める。冷たく冷えたその身体はさながら氷のようだ。

それでも、手を離さない。そうせずにはいられなかった。彼の涙がどんな物であるにせよ漠然と思ったのだ。

これは昔の私だと。

自分がどんな存在か知らされて、空っぽになっていた当時の私自身なのだと。

私は医療班が来るまで彼を抱き締め続けた。壊れないように、壊してしまわないように……

それが私――フェイト・T・ハラオウンと彼の初めての出会いでした。

出会い

あれから十日が経った。医療班の迅速な行動と、発見が早期だったのが功をそうしてあの人は一命を取り留めたらしい。

らしい――という伝聞なのは言葉の通り直接確認したのではなく、人づてに聞いたから。

あの後、私は彼が見つかった事で更に何かが起こる可能性。または彼のような次元漂流者が見つかる可能性を考え、増援を要請しその部隊の指揮を取りつつ私自身も動いていたので、彼の安否も身元確認も満足に出来なかったのだ。

その件が一段落した後も、私が元々受け持っていた事件の調査報告書や解決した後の法的措置などいつも以上にハードな十日間が待っていた。

そして、漸く余裕が出来た今日。

「ねぇ、フェイトちゃん。その人って聖王病院に入院してるの？」

「うん。元々首都の中央病院だったんだけど、かなりの重症だったから設備の整ったここに運ばれたんだって」

私は大切な友達。高町なのはと一緒にここ聖王病院にいます。

高町なのは――私を救ってくれたかけがえのない友人。管理局内でも指折りの戦技教導官にして、“エースオブエース”の称号を持つ空戦魔導士。

なのはがいなければ、私は今ごろこうしていない。管理局で働く事はもちろん、満足に生きているかどうかさえ疑問だ。

それほどなのはは私にとってかけがえのない存在。

「フェイトちゃんにもやっと春が来たね～」

「な、なのは！　別にそんなのじゃ……」

「でも、顔真っ赤だよ～」

「そんな事言われたら誰でもこうなるよ！」

私のそんな反応になのはは楽しそうに笑っている。完全にからかわれてる……私。

「そ、それに！　これは一応仕事なんだよ。管理局としては次元漂流者を放っておく訳にはいかないし……」

「分かってる分かってる。もう、フェイトちゃんは真面目さんだなぁ」

リラックスリラックス、となのはは私の肩をポンポンと叩いて笑いかけてくる。なのはがこういう顔をすると、怒りたくても怒れなくなる。案外なのははその辺りを長年の付き添いで分かってきてるのかもしれない。何か対策考えよっかな……

でも、そんな時間も悪くない。なのはとはさすがに四六時中いる訳にもいかない。だから、こんな何でもない時間がものすごく大切に思えてくる。

正直を言うと今日なのはを呼んだのは、万が一の時に頼れる人がいると心強いと思ったのとは別に単純になのはと話をしたかったのもちょっぴり理由に入っている。

まぁ色々とあるけれど、一つだけはっきりした事は私はやっぱり幸せ者だと言う事。こんな幸せがずっと続くように先ずは目の前の事

を片付けよう。いや、そんな事を言ったら今から会う彼に失礼だけれど……

――――――――――――

あらかじめ聞いていた病室の番号を看護師の方に聞き、部屋に向かう。すると、後ろからバタバタと幾つもの足音が聞こえ、聞こえたかと思えば、何人もの子供の集団が私達の隣を走り抜けていく。

「元気だね」

「うん」

私の呟きになのはが微笑みながら答える。

子供達は笑いながら皆そろって一つの病室に駆け込んでいく。

「あれ？」

「ん？　どうしたの、フェイトちゃん」

思わず私が上げた声になのはが首をかしげる。

「えと……あの病室。私達が今から行く予定の所なんだけど」

そんな事を言いつつも、私達は病室の前にたどり着く。そして、病室のドアを開けようとした瞬間――

「お前ら……いい加減にしろぉぉぉぉぉ！」

一人の男の声が聞こえてきた。それも割と大音量で……

（なんだろうね？）

（うん）

私達は病室の前で顔を見合わせ念話でそうやり取りする。

「お前ら、マジでいい加減にしろよ！　ここはお前らみたいなガキがたむろする所じゃねぇんだよ。大人の世界だ大人の」

「俺はもう大人だぞ」

「私も～」

「ジュース片手にクッキー頬張ってる奴を大人とは呼ばん。コーヒーもまだ飲めんお前らは子供で十分だ！」

「あんな苦いの飲める方がおかしいぜ」

「あの苦みの深さを知らんとは……やはりお前らはガキだな。いいさ。コーヒーが飲めない。けれど、大人を名乗りたいお前達はチョコチップクッキーのチョコチップの若干の苦さを『あれ？　これ大人の味じゃね？』とか勘違いしながら食るように食らうがいいわ！　食らって食らって、お父さんの稼いだ給料も容赦なく食るがいいわ！　つーか、例えだから！　例えだから本当にチョコチップクッキーを取り出して食るんじゃねぇ！！　そして、俺の分もあるなら頂戴！　ギブミー、ギブミーチョコレートォォ！！」

（……ねぇ、フェイトちゃん。言ってる事分かる？）

（ごめん、なのは。分かりたくない）

だんだんとこの病室に入るのが怖くなってきた。言葉を聞いているだけでも、何だか部屋の中がすごい事になっているのが目に浮かぶ。

けれど、ここで引き返すのも忍びない。とても恐ろしくはあるが……

意を決して扉に手をかける。

「かくなる上は……」

扉の向こう側から何か男の人が言っているが気にしない。私は思い切って病室のドアを開ける。

「布団バスターじゃあぁぁぁぁ！！」

そして、開けた瞬間に目の前に飛び込んで来たのは……人の頭サイズに丸められた布団の塊だった。

「あ」

「あ」

当然、予想も出来ない攻撃に反応出来るはずもなく……それは勢いとは裏腹にポスリと弱々しい音を立てて私の顔に直撃した。

――――――――――――――――

「本当にすいませんでした」

ただ今の状況。皆さんお分かり頂けるだろうか。俺は病室らしき場所のベッドの上で見知らぬ女性二人に土下座していた。

色々とその前に思う所はあるが、今はこの女性二人に謝るのが優先事項であり、最重要課題である。それ故に他の事は取り敢えず心の隅に置いて頂きたい。

「すいません。ほんっとすいませんでした。目が覚めたら見知らぬ所だし、地名聞いても聞いた事のない場所だし、周りの人とは会話が噛み合わないし、挙げ句の果てに病室が子供達の溜まり場になってしまった事でもう自暴自棄になってテンションが上がってしまって……何時もはこんなんじゃないんです。俺は基本的にツッコミ要員なんで」

「えと……取り敢えず何も見なかった方向で処理していいかな」

「はい……そうして頂けると大分ありがたいです」

栗色の髪をした女性の苦笑混じりの言葉に、かなり救われた気持ちになりつつ、ベッドに擦り付けていた顔をゆっくりと上げる。

「じ、じゃあ……自己紹介からかな？　私は時空管理局執務官フェイト・T・ハラオウンです」

「同じく時空管理局所属の魔導士高町なのはです。よろしくね」

「はぁ……」

栗色の髪の女性高町なのは。金髪の女性フェイト・T・ハラオウンと軽く握手を交わす。

正直な所、俺には今の状況が何一つ分からない。俺が目を覚ましたのはつい二日前。医師から説明を受けたが俺は一週間近く昏睡状態だったそうだ。

まぁ、そこまでは百歩譲って許容しよう。思い出したくもないが遥か昔に目覚めたら年数跨いでいたなんて経験がある。魔術絡みであ

るのは言うまでもない。

そうだとしてもだ。全く知らない場所にいるなんて経験は、あの日を境に常識はずれの体験を続けてきた中でも初めての出来事である。

今いる場所を知らないとかそんな単位規模の話ではない。世界単位で知らないのだ。

阿呆らしい言い草だと笑われるかもしれないが、実際にそうなのだから仕方がない。

証拠として俺はこの世界のどんな地名も、有名人も、歴史も、極めつけにはこの世界の言語が読めないのだ。

それはただ単に俺がその情報だけを実に都合良く忘れているのかもしれない。

もしかしたら、この世界を知っていたのに何かの衝撃で記憶喪失にでもなったのかもしれない。

しかし、そんな可能性は恐らくゼロだろう。文字通り起こり得ない事象。確率。

何故なら、俺は覚えているから。

精神が身体が血潮が脳髄が臓腑が。俺を形作る全ての要因が覚えている。

奴への渇望を、奴への憎しみを、奴への復讐の怨念を、奴と出会い殺し合ったこの手に残る感触を。

それだけで十分だ。それだけで俺は俺で、今まで存在し続けてきた俺なのだと確信が持てる。

論点がずれたが客観的に見ても、俺は意識を失う前の俺と同一存在である事は確かだろう。ならば、そんな事柄も十分証拠足りえる。

そして、最初の問題に戻るのだ。俺は一体どうやって、どういう経緯があってこんな所にいるのか。更に、どうしてこんな面識のない美がつく女性二人が俺の隣にいるのか。

さっぱりである。

「あ〜、俺達って面識ありましたっけ？」

「会って話すのは初めてだね。私は一方的に君を見た経験はあるけ

れど……」

「私に至っては全部初めてかな。今日の朝まで知らなかったし」

ハラオウンとか言う女性に続き、高町という女性が続く。

「だよな。だったら、何で俺は君達みたいな美人にお見舞いに来てもらうような素敵イベントに遭遇しているんだろうか」

言って考える。どうにも突拍子がなく理解が回らない。ここにたどり着くまでの原因は見当がつく、しかし偶然にもこのベッドの上に現れたなんて言うご都合主義万歳な展開はないだろう。

そうだとしたら、何処かに意識を失って倒れていたのを、誰かにここまで運んで来てもらったと考えるのが妥当か……

前言撤回。それなら十分ご都合主義万歳である。

まぁ彼女達はここにいる以上、俺と何らかの繋がりがあるのだろう。だったら、彼女達に聞いた方が速度的にも効率的にも良いに決まっている。

「あの、俺ってさ……」

さっそく実行に移そうと彼女達に視線を向けると、二人は少々頬を赤く染めて照れるように俯いている。

あぁ、純粋だな。と、何となく二人の様子の原因に検討を立てながら、心中で呟いた。

「お二方。美人とか綺麗だとか言われ慣れてないのか？」

「え……まぁ、その……」

「余りに自然に言われたから……ちょっと面食らっちゃって」

にゃははと、高町が照れながらも人懐っこく笑って見せる。いや、まぁ予想はついていた。俺はここで『顔が赤いけどどうかしたか？』みたいな定番の台詞を吐くような鈍感ではない。

他人の心情が読めなければ色々と危険な生活を送っていた身の上としては、他人の心情に鈍感などと言うのは致命的なのだ。

使える物は使う。理解出来る事は最大限に理解する。人の心情に気付けない馬鹿が恋愛をするな。

アイツから貰った数少ない教訓の一つだ。まぁ、後半の恋愛云々は全く持って役に立たないが、前半の二つは中々どうして……あの女（バカ）にしては珍しくいい言葉である。

因みに俺が女性に対して綺麗だの美人だのさらっと言えるようになったのは……言わずもがなアイツの全くありがたくもない教育のおかげである。

「すいません。あるバカに仕込まれてから、そういう褒め言葉を言うのに抵抗がなくなって……」

「い、いえ。こちらが勝手に恥ずかしがっただけですから、別に……」

ハラオウンが慌て取り繕うも、何だか妙に気まずい雰囲気になってしまう。

「そうだ！　フェイトちゃん。ほら、やる事があったんだよね」

「あっ、う、うん！　そうだった」

高町のナイスフォローに、これまた慌ててハラオウンが答える。そして、気を取り直すようにわざとらしく軽く咳払いをした。

「えと、じゃあ……実はあなたにお聞きしたい事が幾つかあります。ここでは少々聞きにくい内容ですので、屋上ででも話しましょう。ご同行をお願い出来ますか？」

そう言われて、今更ながらにこの二人が管理局とやらの組織の人間だという事に実感が湧き始めた。どんな組織か知らないが、これは俺にとってもチャンスだろう。色々と情報が手に入る。

「……はいはい。同行しましょう。じゃあ、さっそく行きましょうか？」

そう言ってベッドから降り、唯一自由になっている右手を軽く回す。左手はもちろん吊っている。

そして、右手で点滴のキャスターを持ち、屋上に向かった。

前進

「じゃあ、どうぞ。話せる範囲なら幾らでも話しましょう」

屋上に着き、二人をベンチに座らせてから、その向かい側のベンチに腰を下ろし口を開く。

「じゃあ、先ずはお名前から」

「あ～～……」

さて、聞かれると分かってはいたが、俺にとってこの上なく答えづらい質問が来た。

普通の人なら名前ぐらい当たり前に答えるのだろう。それに彼女達は管理局という何ともらしい組織の人間のようだ。堂々とそれを自己紹介に盛り込んだのだから、少なくとも国家的な組織なのだろう。

警察に事情聴取を受ければ、大半の者は自分の名前など隠す気もなくなる。管理局という看板はそれとほぼ同じ効能を持つに違いない。

しかし、それはあくまで一般の話である。

そう言えば、一般や普通を何だか悪く言っているように聞こえるかもしれないがそんな事は決してない。

これ以上長くなるのもあれなので、簡単に理由の発表としよう。

俺は復讐に身を投じるようになってから、自分の名を自分の物として扱わないようにしてきた。

俺はやはり人間だったのだ。あの女に拾われた時から、自分がこれからやるであろう事を心の底では恐怖した。

しかし、俺は復讐をせずにはいられない存在。奴を見た瞬間に自動的な機械のように今の今まで考えていた事が消し飛び、奴を殺す事だけしか考えられなくなる。

そして、そんな自分を自分だと認めたくない。俺は、あの家族から名前を貰った俺がこんな事をしては今までの幸せだった自分が消えてしまう気がした。

要は単なる我が儘だ。

幸運な事にと言うべきか俺が力を付けるにつれ、業界ではある通り名で呼ばれるようになったため、それからはその通り名を有り難く頂戴した。

まぁ、結局長くなってしまったがそういう理由で俺は名前を聞かれると大分困る。

しかし、その通り名を名乗った所で怪訝な顔をされるに違いない。何せ名字も糞もないのだ。詳細の分からない怪我人から、一気に不審者に昇格するのは目に見えている。

なら、偽名を使えばいいと思うかもしれないが、偽名は後になって何かと厄介な代物なのだ。詳しくは省くが過去の失敗例から偽名は使いたくない。

なら、最終的に本名を名乗るしかなくなるのだが……やはり、抵抗がある。

使える物は使うという考えを出した手前、これではとてつもなく情けないのだが仕方がない。

まぁ、考えてみればここはどうやら俺の知っている世界じゃないし、俺は普段は何ら変わりない一般人だ。奴と会うまで――または昔のように仕事をする時以外は大丈夫だろう。

少しぐらい……この境遇に甘えてもいいよな。

「雄大です。高橋雄大（たかはしゆうた）」

「雄大さん……ですね。では雄大さん。年齢は？」

「十八。あ……いや、今年で十九」

「出身地は？」

「日本の東京」

「えっ？　日本の人なんですか！？」

俺のその答えに今まで黙っていた高町が急に反応する。

「あ、あぁ。東京つっても千葉よりだけど」

「私も日本の出身なんです。わぁ、地球出身ってだけでも珍しいのに、まさか同じ国出身の人に会えるなんて」

「地球出身！？　何そのスケールのでかさ！　ここ地球じゃねぇのかよ！？」

「うん。ここは魔法都市ミッドチルダ。地球はここことは別の次元に存在する世界なの」

「どうりで分からない事だらけだと思ったよ」

いや、薄々感付いてはいたがそれにしたって母なる地球から離れてしまうなんて驚き物である。

何だかその事実を聞いた瞬間、足元が急に物寂しく感じられてきた。宇宙から初めて地球を見たガガーリンもこんな気持ちだったのだろうか。

「ここでは雄大君みたいな人を次元漂流者って言って、ミッドチルダも地球も次元を経て無数に存在する世界の一つなんだよ。そして、その無数に存在する次元世界を管理するのが、私達管理局の仕事ってわけ」

「最低限でありながらも分かりやすい説明ありがとう。しかし、時に高町さん。雄大君という一見純粋なイメージを含みつつも、何故か呼ばれる本人にとってはこの上なく恥ずかしいその呼び方は、もう既にあなたの中では決定事項なのか？」

「そんなに変かな？　私は普通だと思うんだけどな～。じゃあ……ゆうゆうとか？」

「雄大君と呼んで下さい！　お願いします！」

何を言いだすんだこのレディは。そもそも、初対面で普通君付けで呼ぶか？

「まぁ、取り敢えず。雄大さんはそういう立場の人なので、私達管理局が保護している状況なんです」

「あぁ、それで色々聞かなきゃいけない訳か。俺が言うのもなんか違う気がするけど大変なんですね」

ハラオウンの言葉に素直な気持ちを打ち明ける。まぁ、そうだろう。結局、彼女達がここにいる理由は仕事の為であって、彼女達の意志ではないと言うこと。

組織というものはそこら辺りが面倒でもあり、効率的である。良く出来た社会的集合体だ。

「じゃあ、質問に戻りますけど……あなたはここにいる原因またはそれらしき物に心当たりはありますか？」

ありまくりである。というか、自分で引き起こした事態である。

ここに来た原因と言うのは、おそらく奴との必殺同士の打ち合いで生じたあのブラックホールのような物に違いない。

原理は分からないが、俺の力と奴の力がぶつかり合い、その影響で生まれたエネルギーの集合体が“次元”と言う概念に作用してしまったのだろう。

それなら俺だけの責任ではない。奴にも責任はある。いや、むしろ奴が全て悪い。

「え～、喧嘩をして気付いたらここにいたって事ぐらいしか分からない……です」

「喧嘩……ですか？」

「えぇ、喧嘩です」

ハラオウンが疑問の眼差しを向けてきたが、きっぱり言い切る。嘘は言っていない。ただ、程度が段違いなだけだ。

「そうですか……なら、次は……」

それからハラオウンの質問は三十分程度続いた。その中には、犯罪歴があるかどうかなんて言う割と重大な事から、映画や小説の好きなジャンル、食べ物の好き嫌いなどのどうでも良さそうな事まであった。

しかし、これらの質問は全て無駄ではないのだろう。一見無駄に思える質疑応答も、その人物を調べる重要な情報。

つまり、彼女のやっている事はプロファイリングのような物だ。俺は次元漂流者という保護される立場ではあるが、極端な話世界征服を目論む大悪党ならば、保護は保護でも拘置所での身柄預かりとなるだろう。

彼女はそれを調べているのだ。俺がこの社会に害を為す人物かそうでないか。それを判断した上で、今後の俺の処遇を決めるといった

辺りだろう。

――――――――――――

「では、これで質問は終わりです。それでここからは今後の事になるんですが……」

ハラオウンの少し改まった口調に、自然と佇まいを正す。ここからの話は俺にとってかなり重要な物だ。

「実は雄大さんの検査結果を見せて貰った所、リンカーコアの反応が検出されました」

「リンカーコア？」

聞き慣れない単語に思わず復唱する。

「リンカーコアって言うのは、魔導士の魔力の源……言うなればもう一つの心臓って感じかな。これがないと魔導士にはなれないし、もちろん魔法も使えない」

「へぇ……所でさ、さっきからちょくちょく魔導士とか、魔法って言葉が出てくるけどさ具体的にはどんな物なんだ？」

高町の説明に納得しながらも、それとなく探りを入れてみる。この世界の魔法と呼ばれる概念は、俺の世界の魔術と一緒なのかどうか。それによって、俺もおおっぴらに力を使えるかどうかも決まってくる。

――それにこの世界の魔法が俺のまだ知らない力だとするならば、俺はこの力を手に入れたい。奴を殺すには色々と力が必要だ。使える力が多いに越した事はない。

アイツはもう俺がいたずらに何かを求める事は無くなると言っていたが、結局奴を殺す事は叶わなかった。

だから、俺はまだ求め続ける。それが破滅の道でも――

「この世界の魔法はリンカーコアから生成される魔力を使って、空を飛んだり、弾を作って飛ばしたり、ファンタジー小説とかでよく見るような物と大差はないかな」

「でも、魔法の行使には“デバイス”って言う機械を通すのが一般的なんだ。デバイスは魔法行使の補助的役割をしてくれるから、生身で魔法を行使するより効率的なんだよ」

「なるほどね。イメージ的には少し科学に傾いた魔法ってとこか…

…それにしても、今更ながらにえらく進歩した世界に来たもんだな」

高町とハラオウンの説明に感心仕切った調子で呟く。何より魔法という力を社会全体が認めている事が驚きだ。秘匿とされるべき俺達の魔術とはそこら辺りも違う。

「それでなんですけど、雄大さんはリンカーコアを持っている時点で魔導士になれる資質を十分に持っているんです。次元漂流者として、雄大さんを元の世界に帰すにはその世界の座標を調べるのに時間がかかりますから、その間の生活手段として管理局の魔導士になるといいんじゃないか――と私は思っているんです」

「俺が？　それは願ってもない事だけど……魔導士になるために具体的には何をすればいいんだ？」

「先ずは陸士士官学校に入って、そこで戦闘や魔法の基礎を学んでいくという形になりますけど……」

なるほど。魔導士とやらの力を得る為には色々と手順を踏まなくてはいけないようだ。

まぁ、しかしいいだろう。どうせ向こうの世界に帰るあてもないし、理由もない。理由に至ってはおそらくこちらの世界に存在するだろう。根拠のない直感だが、漠然と理解出来る。

奴はこの世界にいる。それだけは間違いのない事実だと。

ならば、奴の情報を集めつつ、魔法に、管理局に触れて見るのもいいかもしれない。

「も、もちろん、どうしたいかはあなたの自由ですし、個人的な事情もあると思いますから、無理にとは……」

「よし、ならそうするか」

「へっ？」

俺の答えが予想外だったのか、ハラオウンは間の抜けた声を出し、高町は意外そうな視線を俺に向けている。

「なんだよ。なんですか。そんなに驚く事かよ、元々そっちが持ちかけてきた話だろ？」

「いや……その、余りにもあっさりしてたから」

「あのですね、ハラオウンさん。俺は管理局に保護されるとは言え、この世界では何のパイプもない孤児みたいなもんですよ？　そこに

藁が降ってきたら掴みたくなるのは当然だろうに」

「あっ、……はい」

俺の様子に少し戸惑った様子を見せるハラオウン。いきなり語るような口調で話されたらそりゃ戸惑うだろうが……

「それにさ、どうやらこの世界には俺が生きる理由がありそうだし」

空を見上げ、何の感慨もなくポツリと呟く。その言葉が悲しげに聞こえたのか、高町とハラオウンは何だか申し訳なさそうな顔をする。

「なんて顔してんだよ。お二方。高町さんもハラオウンさんも綺麗なんだから、ほれ笑顔笑顔……あっ」

言ってからまたやってしまったと内心舌打ちする。二人を見ると、高町はどうやら耐性が付いてきたのか若干頬を染めながらではあるものの微笑んでいるが、ハラオウンに至っては顔を真っ赤にして俯いている。

「あ～……悪い。またやっちまった」

「気にしないでいいよ。別に嫌な気分にはならないから」

にゃははと、高町は笑いながら答えるが、未だ再起しないハラオウンを見ると何とも複雑な気持ちになる。

「それと雄大君」

「うん？」

「高町さんじゃなくて、なのはでいいよ。こうして知り合ったのも何かの縁……でしょ？」

相変わらず人懐っこそうな笑顔を向ける高町に、妙に朗らかな気分になりながら微笑み返す。

「じゃあ、なのはで。ついでに俺も呼び捨てにしてくれると有り難かったりするんだけど……」

「うん、分かった。ゆうゆう」

「そんなに俺をいじめて楽しいか！」

冗談冗談と笑うなのはを見つつ、ハラオウンに視線を向けると

胸に手を当て、深呼吸をしていらっしゃる。

いや……何だかすごく悪い事をした気分だ。

「あ～、大丈夫？　ハラオウンさん」

「……大丈夫です。ごめんなさい」

謝られるとすごい罪悪感がのしかかる。いや、本当ごめんなさいハラオウンさん。でも、言ってる事は嘘じゃないですからね。

「じゃあ、私も名前で呼んでくれると嬉しいな。ハラオウンさんって呼ばれるのは慣れてないから」

「ん？　あぁ、じゃあフェイトで。俺の事は……」

「ゆうゆうだね」

「違ぇーよ！　何この人達、超怖い！　初対面で俺の性能をここまで引き出した奴初めてだ！？」

「えっと……ごめんなさい……」

「本気と書いてマジだった！！」

とまぁ、そんなこんなの一悶着あったが、これで取り敢えずは今後の方向性と、やるべき事が決まった訳だ。

まぁ、今の状況は右も左も分からない立場ではあるが、それほど手詰まりな状況ではないし、昔に比べれば相当幸運な状況だ。

トントン拍子に進み過ぎた事に若干の不安を覚えるが、まぁ構わないだろう。

「じゃあ、雄大。これ」

話も終わりに近づいた時、フェイトが茶色の封筒を俺に差し出す。

「何だこれ？」

「それは陸士学校への推薦書。それがあれば、陸士学校で訓練が受けられると思うから。まぁ、本当はこの手の推薦はなのはの専門なんだけど……」

「そうなのか……まぁ、推薦書なんて物が貰えるだけで有難いよ」

「うん、そう言って貰えると助かるな」

フェイトは俺にそう言いながら柔らかく微笑む。今更だが、本当にこの二人は美人である。

話を終え、屋上からそのまま二人を送り出す為に病院のエントランスまで向かう。

最初は怪我人にそこまでさせられないと二人に断られたが、大丈夫だと無理やり納得させ送っていった。

「またね、雄大君」

「じゃあね、雄大」

「ん。二人ともありがとな」

入り口で簡単な挨拶をして、二人は軽く手を振りながら病院を出ていく。それを見送りながら、俺も軽く手を振った。

二人の姿が見えなくなった後、手元にある封筒に目を落とす。この封筒にこれからの先行きがかかっていると思うと、手に残る僅かな重量感がこの上なく貴重に感じられる。

さて、病室に戻ろう。また、子供達が勝手に使用していたら追い出さなければ……

「待ってろ。また直ぐに殺しに行ってやる」

不意に口から出た無意識的な言葉は、自分のものとは思えないほど、ひどく低い声だった。

機動六課へ

あれから更に一ヶ月が経った。何だかすごく簡単に、尚且つ無駄にテンポ良く時間が過ぎて行っている気がするが気のせいだろうか。

取り敢えず近況報告。

二人に出会った日から約一週間後に無事退院した俺は、その足で陸士士官学校を訪れ、フェイトの推薦書のおかげでその日の内に士官学校へ入学が出来た。

士官学校と言っても、大学や専門学校のように学生生活を送るのでもなく、どちらかと言うと魔導士専門の訓練施設のような物だ。

基礎的な魔法の知識、理論、活用法。武器、デバイスの取り扱いに戦闘訓練。管理局が半ば軍隊めいた組織だからか、何だか兵隊になった気分だった。まぁ、陸士なんて言うぐらいだから、あながち間違ってもいないのだろうが。

何にせよ事はかなり順調に進んでいっている。

しかし、さすがに予想外の事態とは起こるもの。今回の場合、俺は

どうやら順調に進み過ぎたらしい。

はっきり言えば、士官学校……これからは訓練校と呼ばせてもらうが、そこの訓練が俺にとってはほとんど既知の事実。もとい、役に立たないものだったのである。

こんな事を言えば、明らかに周りからは小言を言われるのは分かっているのだが、如何せん過去が過去なだけにどうしようもない。

もちろん、訓練校の訓練全てが無駄だった訳ではない。特に知識面においてはかなり参考になったし、この世界の情報も大まかには整理が出来た。

ただ、戦闘訓練に関してはこれと言った収穫はない。昔から戦いには慣れている為当然といえば当然なのかも知れないが、あまりいい刺激がなかったのは事実だ。

あったとすれば、訓練校に戦技教導に来ていたなのはと模擬戦闘を一度やった事ぐらいだ。まぁ、その事は取り敢えず保留で……出来れば思い出したくない。

まぁ、結局の所。訓練校で魔導士になるためにがむしゃらにやりすぎたせいで、一年間かけて消化するカリキュラムをものの三週間ちょいで消化仕切ってしまったという自分でも、アホなの？　俺。っ

てぐらいの前代未聞の出来事を起こしてしまったのである。

おかげで訓練校の連中の間で話題になり、訓練校の教官には士官学校始まって以来の約一ヶ月卒業を言い渡され、挙げ句の果てには雑誌の取材までもが飛び込み、何だか大変な事をしてしまった。

才能だの、天才だのと言われる事もまちまちだが、俺は基本的に新しい事を始めた時は恐ろしく吸収が早いのだ。それは言わずもがな奴への渇望が全ての原因である。

この修得の早さと、未だに力を求め続ける姿が実は俺が通り名で呼ばれるようになる原因であるのだが、それはここで話す事でもないだろう。

以上近況報告終了。我ながらやっちまった感が拭いきれない一ヶ月でした。

さて、そんな俺がただ今何処にいるかと言うと、ミッドチルダ中央部、首都クラナガンから少し離れた湾岸部に建っているある隊舎の前に俺はいた。

「立派だね～」

管理局の茶色の制服を着た俺はその隊舎を見て自分でも分かる気の抜けた声で呟く。

ここにいる理由はほんの数日前、教導の時に連絡先を交換し合ったなのはからの一本の電話が原因だった。

――――――――――――――――

「機動六課？」

「うん」

なのはからの電話の内容はこうだ。なのはの友人である所の人が、今新しい部隊――機動六課を設立しようとしている。その部隊に参加してみないかとの事だった。

「いや、俺にとっては願ったり叶ったりかも知れないけどさ、そこって選りすぐりの精鋭部隊なんだろ？　俺みたいな魔導士になって一ヶ月ちょいの奴が行っても邪魔になるだけじゃないか？」

「正確には精鋭の卵達――だけどね。この部隊で実戦経験を沢山積んでもらって、色んな事を教えてあげて立派になってもらうのも部

隊の目的の一つではあるんだよ。　そう考えれば一ヶ月で訓練校卒業なんて前代未聞の事をした雄大君は立派な精鋭の卵。ほら、何も気後れする事なんてないでしょ？」

「まぁ、管理局のエースオブエースにそう言われると悪い気はしないけど……そもそも何で俺なんだ？」

「六課の部隊長――私の友達でもある八神はやてちゃんがね、雄大君の噂を聞き付けて前衛部隊としてぜひ欲しいって言ってたの。それで私が知り合いだから、本人に聞いてみようか？　って」

「……構わないけどさ」

「じゃあ、はやてちゃんにそう言っておくね。おやすみ」

――――――――――――――――

とまぁ、一連のやり取りがあり今日俺は晴れて機動六課のメンバーとして正式に出向した訳である。

この世界に来てからかなり流されっぱなしでここまで来たが大丈夫だろうか？　今更ながらに心配になってくる。

聞いた話だと、なのはとフェイトもこの部隊にいるようだし当面は大丈夫なはずだよな。そんな風に無理やりその心配を心の中に押し込んで、その場で深呼吸する。

うじうじ悩んでいても仕方がない。取り敢えず行くとしよう。

仕上げに両手で顔を叩き、気合いを入れ直すと隊舎へと最初の一歩を踏み出した。

――――――――――――――――

隊舎の人に部隊長室と呼ばれる場所を案内してもらう。どうやら、俺が来る前に機動六課設立の挨拶があったようだが、俺はそれには仕組まれたかのような突然の交通機関のトラブルでものの見事に間に合わず、事前になのはに連絡をして、遅れる旨を伝えておいた。

しかし、そうだとしてもこれは最悪の第一印象だ。出向初日に理由はあれ遅刻し、六課の設立式にも参加できなかったのだ。一応、スカウトを受けた身ではあるからそうあからさまに邪険にされる事はないだろうが、少なくとも良いイメージは持たれないだろう。

まぁ、そこは仕事で挽回するしかない。幸先の悪いスタートだが行き着く所は決まっているのだから、そう深く考える事もないだろう。

気持ちが落ち着いてきたのを確認し、制服のシワを軽く伸ばす。身だしなみもきっちりしている事を確認してから軽くドアをノックする。

「どうぞ」

室内から少し関西なまりの女性の声が聞こえてくると同時にドアが自動で開く。

中にいたのは同い年くらいの女性。肩にかかるくらいの自然な色の茶髪に、穏やかそうな顔。

関西なまりを聞いたからか、その容姿からか、何とも優しそうな人だと言うのが第一印象だった。

「失礼します。ただ今機動六課に出向致しました、高橋雄大三等陸士であります。交通機関のトラブルとは言え、初日から遅刻してしまい申し訳ありませんでした」

敬礼と共に自己紹介と謝罪を同時に済ませる。言える事は先に言っておいた方がいい。後回しにしてタイミングを逃しては元もこもない。

「初めまして。機動六課課長及び部隊長の八神はやてです。これから宜しく」

「はい、宜しくお願いします」

俺は訓練校の教え通り、しっかりと張りのある声で出来るだけ好印象を与えるべくいつもより五割増しぐらい真面目な顔で返事をする。

そんな俺の様子を見て、八神部隊長は何処か怪訝な、そして不思議そうな顔をする。

「なのはちゃんやフェイトちゃんから君の事はそれなりに聞いとったけど……えらい話と違うな」

「そう……なんですか？」

「何や聞いてた話やと、病室の布団を武器に暴れ回るかなりの変人で、会話の所々に女たらしの可能性が見え隠れする人や聞いてたけど……」

「いい称号が一つもない！」

ちょっと待て。あの二人どんな説明したんだよ。確かに行動面に関しては事実だよ、事実だけど、あいつらあの時の事見なかった事にするとか言ってたのにばっちり口外してくれちゃってんだろうが。

「あっ、そういうツッコミもあるって聞いてたで」

「何でそんな事分かるの！？　一回会っただけであいつらそんなに俺の事見抜いてたの！？　そんなに俺の心はすかすかか！　ガラス張りか！」

そこまで言って、ハッと我に返る。やってしまった……つい癖でツッコんでしまった。

頭を抱えたくなる衝動に襲われながらも、それを何とか制してわざとらしく咳払いをする。

「……すいません。癖で」

「ええよ。なのはちゃんやフェイトちゃんの知り合いなら信頼は出来るしな。いつものように振る舞ってくれて大丈夫やで。私も堅苦しいのは嫌いやしな」

そう言って、八神部隊長は優しそうに微笑んでくれる。ヤバい……この人超優しい。

「じゃあ、お言葉に甘えて……」

「うん。ええ子やなゆうゆう」

「俺の感動を返せ！！」

叫ぶ俺を見ながら、八神部隊長はけらけら笑っている。いや、予想はしてたけど……なのはさん、怖い子だわ。

「それじゃあ、挨拶も済んだし取り敢えず俺は今日これからどうしたら？」

「まぁ、本来ならフォワードメンバーと合流してなのはちゃんの教導を受けてもらいたいんやけど、その前に話したい事があるからちょっといいか？」

言われてソファーに促される。もちろん拒否権などないし、行使するつもりもないのだが、部隊長の部屋だからか妙に緊張する。

無言でソファーに腰をかける。真新しい革の匂いがほんのりと鼻をくすぐり、少しだけではあるが身体の強ばりがほぐれた心持ちにな

った。

「で？　俺なんかの何を聞きたいんです？」

「実はな、ここにおるメンバーは私が色んな方面を駆け巡って捜し出した精鋭の卵。もしくは間違いない精鋭ぞろい。だから、私はメンバー全員の力や技術をそれなりには把握してるつもりや。けど……」

「俺に関してはほとんど情報がない……と」

俺がそう言うと、彼女は頷き肯定する。

「せやから、雄大君の事を色々と聞きたいんよ。まぁ、言いたくない事を無理にとは言わんし、上司の世間話に巻き込まれてもたとでも思って……な？」

「ははっ……何だよそれ」

思わず笑ってしまう。呼び止められて何かと思えば世間話だ。調子が狂うのも当然だろう。

「分かったよ。じゃあ、何から話したらいい？」

「そうやね……雄大君は次元漂流者やけど、家族と離れて寂しくはないの？」

「寂しくはないな。まぁ、家族つっても母親らしき人が一人だけだったし……」

「……らしき人？」

まぁ、アイツはどっちかと言えば歳の離れた姉って感じだったしな。

つーか、昔にアイツが『少しは私を親っぽく敬え』とか言いやがるから、日頃の恩も込めて恥ずかしいのを我慢しながら『母さん』と言ってやったら、問答無用で蹴り飛ばされて『お姉さまと呼べ！』と見事に無茶苦茶っぷりを披露する人間なのであるアイツは。

育ててもらった恩がなければ、本気で係わりたくない人種だ。さすがにあれを母親と断言するのは全国の母親に失礼ってもんである。

あんなのと友達だったなんて……今さらながら俺の両親、なんか凄い人たちだったんだなと実感する。

「俺が十五歳の時に本当の両親が事故で死んでな。両親の友人だっ

た人の養子になったんだ。一応育ててもらったから、母親らしき人って事」

両親が死んだのは事故ではないのだが、さすがに真実をここで話すのは躊躇われる。

真実を言えば、俺は“今の”俺ではいられなくなる。それは俺にとって何の得もないし、彼女には考えなくてもいいことを考えさせてしまうだろう。

なら、伏せるべきだ。血なまぐさい話を話すのもあれだし、被害者ぶるのは自身の中だけで十分。

そんな俺の言葉を聞いて八神は何とも気まずそうな顔をする。

「……ごめん。私、無神経やったわ」

彼女は俺に自分の両親が死んだという事実を言わせてしまった事に落胆しているのだろう。優しい奴だ、優しすぎる。

「そうだ、八神の家族は？」

そんな沈んだ空気を何とかするべくこちらから話をふってみる。

「えっ、私？」

「そう。失礼かもしれないけどさ、八神を初めて見て、何かすごく家庭的な雰囲気だなとか思ったから、どうなのかなぁと」

「そうやね。私も昔は一人やったけど、今はかけがえのない家族が出来た。シグナムにシャマルにヴィータにザフィーラ。それに末っ子のリィン。皆、私の大切な人で、私の大切な家族。因みに家族全員、機動六課に所属してるんよ」

「マジで！？　超人家族じゃん！」

いや、だってそうだろう。何回も言うようだが、機動六課はエリート精鋭部隊なんだぞ？　そんな場所に家族で乗り込んでくるとはすごいを通り越して恐ろしい。

「まぁ、私の事はええよ。私は雄大君の話を聞きたいんやから」

「別にいいだろ？　世間話なんだし」

「ふふっ、それもそうやね」

微笑む八神を見て、自然とこちらも頬が緩む。あれだ。彼女は俗に言う癒し系だな。何となくだけど……

「じゃあ……これはなのはちゃんから聞いたんやけど……」

そんな八神が何気ない口調で言葉を紡ぐ。

「雄大君。何か戦い慣れてるって聞いたんやけど、地球で武道でもやってたん？」

一瞬、眉がピクリと動いたのが自分でも分かった。しかし、それを表には出さず口を開く。

「そんなものかな。さっき話したアイツ――俺の育て親の事な。アイツが男なら強くないとって理由だけで色々やらされたんだ。それがもう凄まじくて凄まじくて……あっ、ごめん。思い出したら涙が……」

「た、大変やったんやね」

苦笑いを浮かべつつ、ティッシュ箱を差し出す八神。すかさず一枚取り涙を拭う。

まぁ、きっかけは違うがアイツにしごかれたのは真実だ。嘘は言っていない。

さっきの家族の話も今の話もそうだが、俺は全ての真実を語らず、事実を脚色して話している。それで嘘をついてはいないと自分を納得させているのだ。

それはただの屁理屈で自己満足。

分かってはいるのだ。しかし、そうでもしないと俺の立つ瀬がなくなる。

俺は基本自己中だ。自分の為にしか動けない愚か者である。

「悪い。まぁ、でもそういう理由で」

「そうか。じゃあ、そろそろ現実的な質問にいこか」

「いつから質問形式になったんだよ」

「話の腰を折らない」

八神にそう一蹴され、言い返す言葉もなく押し黙る。しかし、そう言った彼女は立ち上がり机を軽く片付けると部屋の出口に向かって歩き始めた。

「お～い、八神さん？　何処に行かれるのですか～」

「何処って……雄大君に答えてもらおうかと」

「俺なら此処にいますよ～。何、もしかしてこの状況で第二の雄大君が出てきたりする訳？　セカンド雄大君、セカンド雄大君なのか？」

「馬鹿言ってんとはよ行くよ」

「だから、何処に……」

俺がそう言うと、八神はニヤリと笑う。え……いやいや、何で笑ってんの？　何でそんな小悪魔的な笑みなの？

そんな嫌な予感にも似た寒気を感じていると、八神はその笑みを浮かべたまま俺を指差してこう言った。

「雄大君の身体に聞ける場所や」

「はっ？」

――――――――――――――――

それから八神に引きつられ、連れてこられた場所は隊舎の外。湾岸部に浮かぶ機動六課専用の演習場だった。

どんな仕組みなのか、廃ビルやら何やらが海のど真ん中に佇んでいる。かなり、奇妙な光景だ。景観もくそもあったもんじゃない。

「なぁ、身体に聞くってどういう意味だよ。そろそろ教えてくれてもいいだろ八神部隊長さんよ」

「着いてからのお楽しみや」

そんなやり取りを繰り返す事、実に五回。微妙な数字とか思った奴。安心しろ、俺もたった今そう思った。

演習場の一つの廃ビルをひたすら上に上がりながら軽くため息をつく。全く何だと言うのか……まさか、今さら遅刻の責任をとらされるんじゃ。

そんな事を考えている間に屋上に着く。数階分太陽に近くなっただけで、嫌に視界がまぶしく感じた。

そんなまぶしさの中で屋上にいる四人の先客を発見。

一人は俺のよく知っている奴だ。長い栗色の髪をサイドポニーでまとめた白い教導服の女性。高町なのはその人である。

そして、その隣。管理局の制服を着て、空中に表れたモニターやらコンソールやらを結構な速さで操作している眼鏡の女性。

そこから少し離れた場所、なのはから見て眼鏡の女性がいるもう一方の隣に、桃色のポニーテールの女性が腕を組みながら、眼下に広がる演習場を鋭い眼光で照らしている。

桃色ポニーテールの女性のそのまた隣には、赤い髪を二本の三つ編みにした、小さい女の子がポニーテールの女性同様厳しい顔でビル

の下を見下ろしていた。

八神はそんな四人の元にすたすたと歩いていく。一、二歩遅れつつ俺も着いていった。

「どうや？　フォワード陣の調子は？」

「あっ、八神部隊長」

八神が眼鏡の女性に声をかけると同時に、他の三人の視線が一気に八神の方向に向いた。

「はやてちゃん。わざわざ、どうしたの――って雄大君！」

「うす。なのは」

なのはが驚いた様子で俺を見る。取り敢えず軽く挨拶しておいた。

「はやて！」

すると、俺の前をすごい勢いで赤い風が通り抜けていく。もちろん比喩だがそれだけ速いスピードで、あの少女が八神の前に突っ走っていったのである。

「どうしたの？　わざわざこんな所に……」

「ヴィータちゃん、それさっき私が言おうとした事……」

なのはがそう言うが、ヴィータと呼ばれた少女は意に介さず八神の隣で笑顔を浮かべている。

ヴィータ――確かさっきの八神の話で出てきたな。という事は……

「あの～、あなたが超人家族の一員その一さんでしょうか？」

「誰だ？　てめェ」

一気にガラ悪くなったぞ、おい。

「八神さん八神さん。この子お宅の一員ですよね。いいの？　こんな小さいなりで既に悪い方面で大人の階段登ってるけど……」

「大丈夫大丈夫。ヴィータはいつもこんな感じ、正常、いつも通りや。それよか、雄大君。気を付けたほうがええで？」

「はい？」

えと……話が見えないんだけど、俺は何に気を付けたらいいんだろうか。

ちらりとヴィータ少女を見ると、何故か俯いて身体全体を震せていらっしゃる。

千切れんばかりに両手が握り締められ、何かミシミシと音が聞こえてきました。

――何これ？　またまた、嫌な予感がするんですが気のせいですよね。うん、きっとそうだ、そうに決まって……

「子供扱いすんじゃねェェェェェェェェェ！！」

「向こうずねっ！？」

瞬間、絶叫と共に向こうずねに衝撃が襲い掛かる。あまりの痛さに、衝撃を受けた部分をこちらも叫んでしまう。

「痛い痛い痛い痛いィィィィィィ！！　何すんじゃこのガキィ！　割れた、絶対すね割れた！！　どうしてくれんじゃ、オイィィィィ！」

「知るかこのばーか。お前が私を子供扱いするから悪いんだよ」

「八神さぁぁん！　即刻、今すぐこの子に蹴っていいものと駄目なものの区別を教えてあげて！　蹴っていいのは退屈と親しくもない上司の誘いだって教えてあげて！！」

「だから、気を付けたほうがええて言ったやろ？」

「助ける気ゼロ！？　むしろ、楽しんでるなコノヤロー」

すねを押えて蹲りながら、そんな馬鹿な会話を繰り広げる俺に八神は言わんこっちゃないと呆れている。

つーか、こんなもん予想できる訳ないだろ。そっちにとっては言わんこっちゃないでも、俺にとっては未知との遭遇なんですけど。

「主はやて。しつこいようですが一体どうされたのですか？」

そんな中、桃色ポニーテールの女性が八神に再度此処に来た理由を聞く。それにしても、主って……何かえらく堅物なんだなこの人。

「用があるのは私じゃないんよ。この人」

八神はそう言って、蹲っている俺に視線を向ける。そのせいで、その場の全員の視線が俺に集中する。

「ほら、挨拶挨拶」

「あ、ああ。えと、この度機動六課に配属になりました。高橋雄大三等陸士です。右も左も分からない新人ですがよろしくお願いします」

「ほう、お前が主の言っていた高橋か。何でも訓練校を約一ヶ月で卒業したらしいな」

軽く自己紹介をすると、桃色の女性が興味深そうな目で俺を見始める。何、この人何か怖いんですけど。

「なのはちゃん。今、フォワード陣はどうしとるん？」

「今は訓練が一段落した所、もうちょっと経ったらまた始めようとしてたけど……」

「じゃあ、その後でもいいから少し演習場貸してくれんかな？」

「別に構わないけど……何するの？」

なのはの疑問は最もである。仮にもこの部隊の部隊長がわざわざ演習場を貸して欲しいと言い出たのだ。何かあると思うのが普通である。

「ん、ちょっとシグナムとヴィータのどっちかと雄大君に模擬戦してもらおうと思ってな」

「はい！？」

いきなり何言ってるんでしょうかこの人。

「ちょっと待て待て待て待て。何もしかして身体に聞くってそういう事？」

「そうや。現実的な質問っていうのは、雄大君がどれだけの力を持っているのかって事。強かろうと弱かろうと、どんな戦い方をするか、どんな魔法を使えるか、私が皆に指示を出させてもらう立場にいる以上私はしっかり皆の事を知らなあかん」

そういう彼女は何処か誇らしげで言ってる事に間違いはないんだが……

「だからってそんな急に……」

「部隊長命令や。諦めて従ってな」

何ともにこやかな笑顔で俺の言わんとする事を無言で封殺してくる八神さん。

女性が浮かべるこの手の笑顔は何度も見てきた。これは“ちっとも笑ってない”笑顔である。

有無を言わせない女性の武器。大抵の男はこれには勝てないのである。それは俺も例外ではない訳で……

「……分かりました。やります、やればいいんでしょ。その代わり、

少しぐらい準備させてくれよ」

「それぐらいはええよ。フォワード陣の訓練がもう一段落するまで少し時間がかかるやろうからな」

もう逃げ場もない。観念して白旗を上げつつ、嫌々ながらも命令を聞き入れた。

しかし……状況としては悪くはないのだろう。ここにいる人達のレベルを知る事は出来るし、それによって俺がどれだけ力を出してもいいか測る事も出来る。

まぁ、あちらはどうかは知らないが俺は本気でやるつもりはない。俺の本気なんてものは奴にしか向けられないからだ。

あまりに相手が強くて、俺や奴のような裏の存在だとしたら少しはスイッチが入ってしまうかもしれないが、ここにいる人達はそんな存在ではないだろう。

「じゃあ……シグナム。雄大君の相手頼めるか？」

「はい。主の頼みとあらば喜んで。それに、個人的にも彼には興味がある」

そう言って、こちらに嬉々とした視線を向けてくるシグナムという女性。

ただ、それだけの行為で俺の背筋に寒気が走る。無言の重圧が俺を襲い、四方八方から圧迫してくる。

なるほど……この人は相当な実力者だ。この手のプレッシャーはそれなりに戦いを経験した者、または武道の達人レベルに達した者達が放つ独特なもの。

言い換えれば覇気とか、オーラの類。その場にいるだけで世界に干渉する空気を持つ絶対的な実力者。

しかし、殺気は感じられなかった。その覇気に少しでも濁りがあれば殺気と化す訳だが、それを感じられないという事は彼女はまだ本当の“闘い”を知らないのか、それともそれを隠せるほどの実力者なのか。

どちらにしろ油断すれば、一瞬で終わりだろう。負けるつもりでいるが、あまりに一瞬で終わると俺も測りたいものが測れない。

「じゃあ、着替えてきます。さすがに制服は無理だし」

「ん、準備出来たら戻ってきてな」

そうして、隊舎に戻るべく四人に背を向ける。さて、少々急な展開だがいい機会だ。自分が最強の主人公になったみたいで少し気分は悪いが、俺が少しは強いのだと大いに勘違いしてもらうとしよう。

模擬戦（前書き）

今回は少し長めです。前の投稿から少し時間が経ちましたが取り敢えずどうぞ。

模擬戦

――――――――――――

「はい、じゃあ午前の訓練はここまで。皆お疲れ様」

「お、お疲れ様です……」

その言葉と同時に私は糸が切れたようにその場にへたり込んでしまう。周りを見ると私以外の三人もそうだった。全員が肩で息をして、ぐったりしている事からこの訓練の厳しさがひしひしと伝わってきた。

私――ティアナ・ランスターは、今の今までこの廃ビルだらけの演習場で新部隊に配属されてから初めての訓練を受けていた。

教導官はかの有名な管理局のエースオブエース高町なのは一等空尉。この人の教導を受けられるのはそうそうある事ではない。しかも、ある部隊に付きっきりでと言うならば尚更である。

私の現在所属している部隊。特定遺失物管理部機動六課。この部隊に所属が決まったのはほんの数ヶ月前、コンビを組んでいるスバルと魔導師Bランク試験を受けた時だった。

正確に言えば、その時は勧誘だけだったけれど……結局私はこの話に魅力を感じて此処へ来たのだから一緒のような物だと思う。

そして、機動六課の所属初日。さっそくなのはさんの教導が始まり、私達は午前中だけで今のヘトヘトな状態に至る。

「じゃあ皆。疲れてる所悪いけど、ちょっと見学場所まで移動しようか？」

確かにここでじっとしている訳にもいかない。でも、ちょっと待って。何でわざわざ見学場所なの？

「あの、なのはさん。どうして、見学場所、何ですか」

私以外の三人も同じ疑問を持っているだろう。私が代表してその疑問を口にする。

ただ、訓練を切り上げるなら隊舎に戻ればいいだけなはず。それをわざわざビルの屋上の見学場所にするのはきっと何か理由があるはず。

「うん、実はね今からシグナム副隊長が模擬戦をするの。だから、皆にはそれを見学してもらうから」

なるほど、それなら一応は納得できる理由だ。しかし、シグナム副隊長が模擬戦をするのはいいとしても相手は誰なのか。なのはさんか、フェイト隊長か……

考えても仕方がない。始まれば嫌でもわかる事だ。そう思い立ち、足に力を入れ無理やり身体を立たせる。

「――あれ？」

しかし、無理に立ち上がったからか足腰に上手く力が入らずよろけてしまう。

そのまま、尻餅をつく形で倒れかけた時……

不意に優しい力が私の背中を支えた。

何事かと後ろを振り替える。そこには――

「おいおい、大丈夫か？　オレンジ頭のお嬢さん」

全身真っ黒な装いの男の人がこちらを見下ろしていた。

――――――――――――――――

何をやっているんだろうか俺は。これでは八神に女たらしの可能性が見え隠れするなどと言われても仕方ないようなもんである。

隊舎に戻り、着替えを終えた後、真っ直ぐ演習場に戻ってくると四人の少年少女が半端なく、ぐったりしていた。

あれが八神の言っていたフォワード陣だろう。俺もあの中に入るのか……俺多分一番年上じゃん。

みたいな事を考えながら、その集団に近づいていくと、オレンジ頭の少女がバランスを崩して倒れそうになっていたので思わず支えてしまった。というのが、此処に至るまでの経緯である。

「――っ！　す、すいません！　ありがとうございます」

「あ～、どういたしまして。それにしても、こんなボロボロになって……なのは。お前容赦ないな」

「何言ってるの？　明日からは雄大君もこうなるんだよ」

「マジで！？　本気で他人事だと思ってた」

ついさっき自分がこのメンバーの中に入る事を自覚していた奴が言う台詞ではない。自分の思いを見事数秒の内に反転させた馬鹿の台詞である。

あ～、むなしいむなしい。

「あ、あの、なのはさん。この人は……」

そんな事を考えていると、青い髪にハチマキが特徴的な少女が疲れた様子ながらも、はっきりとした口調でなのはに質問する。

「あ、紹介するね。こちら高橋雄大三等陸士。皆と同じ前衛部隊として機動六課に来た新人さん」

「高橋って……もしかして、訓練校を一月で卒業したっていうあの高橋雄大さんですか！？」

青い髪の少女は俺の名前を聞いた途端、今までの疲れは何処へやら。溢れんばかりに輝く視線をこちらに向けてきた。

「あの私、スバル――スバル・ナカジマです！　よろしくお願いします！」

「あ、ああ、よろしく」

そんなナカジマの勢いに押されながらも、一応最低限挨拶し返す。

「あの……それで雄大さんは此処に何を……」

よっぽど気になったのか、赤い髪の少年が言いづらそうにしつつも尋ねてくる。

「う～ん、不可抗力というか天命というか……強いて言えば、上司の新人いびり？」

「雄大君、この会話はやてちゃん達にもばっちり聞こえてるよ」

「すいませんしたーー！！　ほんの出来心なんです！　人間、愚痴の一つぐらい言いたくなるじゃないっすか。そう！　これはつまり俺に非があると言うよりは俺もあなた様も人間であるが故の確執なんだ！　だから、俺はそんな人間の本質を自然と実行しただけでして……って、いつの間にか逆ギレ的なテンションになってるぅぅ！　長々喋りましたが調子乗ってすいませんっした！！」

恥も外聞もなくこれだけの台詞を一度も噛まずに、硬い硬いアスファルトに高速で土下座する姿はもうどうしようもなく情けないものであった。

いや……まぁ、俺自身なんですけど、あまりの情けなさに自分で自分を認めたくない節があるというか、これが自分だと信じたくないというか……

「嘘だよ」

「お前何なの！？　お前いつもそんななのか！　管理局のエースオブエースは実は猫かぶった小悪魔だってか！？」

「そんな事ないよ。こんなのは雄大君に対してだけ」

「尚更、質が悪いわ！」

とまぁ、こんな具合の会話に四人のフォワード陣は呆然とした様子で俺の事を見ている。

オレンジ頭の少女に至っては既に蔑みを含んだ、冷たい視線もご一

緒にだ。今更ながらに、俺この部隊でちゃんとやっていけるかな？

「雄大君。そろそろ行かないとシグナムさん怒るよ？」

「あ～、はいはい。じゃあ、とっとと行って、ボコボコにぶちのめされて来ますよ」

その言葉にフォワード陣の四人は呆然とした様子から一転、驚愕の表情になるが俺はこれ以上弄られるのも勘弁なので、さっさと歩いてその場を離れる。

さてと、どう負けようかね……

――――――――――――――――

高橋雄大――私も名前だけは聞いた事があった。

次元漂流者ながらも訓練校に入学し、一ヶ月卒業なんて前代未聞の事を成し遂げた今巷で話題になりつつある天才。

そんな人物が此処にいる事にも驚いたし、何より一番驚いたのはあの人がこれからするであろう事。

「もしかして、シグナム副隊長の模擬戦の相手ってあの人なんですか！？」

「そうだよ。皆には今までの管理局での仕事とか任務とかで、大体の力や能力なんかは把握できてるけど、雄大君は未知数だし、これから通常の手段で把握していたら時間がかかりすぎる。だから、模擬戦で手っ取り早くって言うのが八神部隊長の考えね」

なのはさんの説明は理解出来る。しかし……

「でも、いきなり副隊長と模擬戦なんて危ないんじゃ……」

「キャロの言うことは最もだよ。けど、それなら私が許可しない。雄大君は確かに魔導師になって日は浅いけど、それを補って余りある力があるんだよ」

ちびっこ――キャロの言う事を私も考えていた。訓練校を一ヶ月で卒業したとは言え、魔導師として経験が浅ければどうやっても魔法を使った戦闘には慣れていない。言わば素人同然。

そんな状態で部隊の副隊長クラスと模擬戦だなんて自殺行為も甚だしい。相手にもならないはずだ。

しかし、なのはさんはそれを許可した。その経験の浅さを補って余りある“力”。それはつまり――

「レアスキル……ですか？」

そうとしか考えられない。そうでなければ説明がつかないのだ。しかし、なのはさんの答えは予想外の物だった。

「ううん。雄大君はレアスキルらしき能力は持ってないと思うよ。私も全部を知ってる訳ではないから、詳しくは分からないけど」

レアスキル持ちじゃない？　もう何がなんだか分からなくなってきた。今日は何だか衝撃を受ける事ばかりである。

「まぁ、取り敢えず移動しよう。見ればすぐに分かるから」

そういうなのはさんの顔は何だか嬉しそうだ。ますます分からない。

何だかモヤモヤした気持ちのまま、疲れた身体を引きずり私達はそ

の場から移動していった。

――――――――――――

少し歩くとその人はすぐに見つかった。

桃色のポニーテールはそのままに、管理局の制服ではなく明らかに戦闘用の鎧甲冑に身を包んでいた。

「来たか。高橋」

その人――シグナムは、右手に持った両刃の西洋剣を持ちなおしてそう口を開く。

「うわー、ヤル気満々ですね。言っときますけど、そんなに期待しないで下さいよ。俺なんてそこらの一般人と変わらないんですから」

「謙遜しなくていい。お前の事は主はやてと、高町から聞いている。何でも武道に精通していたらしいな」

そう言って、うっすらと微笑みを浮かべる彼女は何とも楽しそうに見える。

「まぁ、それなりには……」

「なら、問題あるまい。私も剣を手にし続けてきた者。相手の度量ぐらい分かっているつもりだ」

シグナムはゆっくり目を開き俺を見据える。その途端に再び寒気を感じた。屋上で感じた物と同様の純粋な覇気を。

「もし期待外れなら、ビルの屋上で目を合わせた時か、今この時にお前はそんなに平然とはしていないはずだからな」

「あ～、そんなら今倒れたら模擬戦は無しって事にしてくれるんすか？」

「そんな事は私が許さん」

「そう言うと思ったよチクショー」

軽い希望を持って言ってみたものの、やっぱり模擬戦をする事は既に決定事項らしい。

軽くため息をついて着替えてきた昔の服。つまり奴と戦っていた時に着ていた黒のコートからナイフを取り出す。

因みにコートだが、こちらに来た時見るも無残な様子だったらしいそれを何とフェイトが直してくれたらしい。

これは純粋にありがたかった。このコートとは俺が初めて魔術師と戦った頃からの付き合いだ。それを手放すのは何かと抵抗があったからな。

「それがお前のデバイスか？」

「いやいや、違いますよ。俺、そもそもデバイスなんて訓練校の支給品の簡易デバイスしか触った事ないんですから」

その言葉にシグナムが初めて驚いたような顔をする。そりゃ当たり前か。この世界ではデバイスを使うのが通常なのだから。

「その代わりと言うのもあれですけど、一応これ刃付いてるんで……」

「安心しろ。私のレヴァンティンもちゃんと切れるからな」

「いや、それは安心できねぇよ」

そんな若干ずれた会話をしていると、演習場に聞き慣れたなのはの声が響く。

「は～い、二人とも準備はいいですか？」

その声に見学場所にいるなのはに軽く手を振る。

「じゃあ、さっそく……模擬戦始め！」

なのはの声が響く。それと同時にナイフを逆手に持ち、シグナムから見て半身の状態で立った。

シグナムは剣を両手で握り、腰を落として典型的な西洋剣術の構えを取る。

「構えなくていいのか？」

「これが構えですよ」

ナイフを持ったまま直立している俺にやる気がないと思ったのか、若干苛立ちを含んだ口調でシグナムは尋ねてくる。

しかし、実際のところこれが構えみたいなものなのだから仕方がない。

「なるほど。仕掛けるべき時とそうでない時の区別は出来るか。しかし……」

シグナムが剣の切っ先を真上に向け、身体と平行になるように構え直す。

「自分から動かなければ何も変わらんぞ！」

瞬間、ぞわぞわともどかしく俺の身体にまとわりついていた寒気が針のように俺を突き刺し始めた。

その感覚と同時に目の前から風が吹く。駆け抜ける疾風は鈍く光った鉛の塊を臆面もなく振り下ろす。

俺の身体はそれに何とか反応した。右手に持ったナイフで眼前に迫ったその鉛の塊を受け止める。

「は……やっ！」

目の前にいるのはシグナムの顔。この一瞬であんな重そうな鎧ごと此処まで来やがった。

思わず口に出た言葉は本心からのものだった。言い訳も出来ない。完全に油断していた。

彼女――いや、彼女達を少し過小評価していた。これは本当に予想外である。

「ハッ！」

シグナムは俺に初撃が受け止められたのを見ると即座に剣を引き、次は横なぎに俺の胴を狙う。

「危な……っ！」

それをさも危なげにギリギリの所で受け止める。しかし、剣の重さは殺しきれない。そのまま振り払われるように軽く横に吹っ飛ばされる。

吹っ飛ばされながらも考える。これは……こっちの思い通りには負けさせてくれないかも知れない。

彼女達のこの強さは俺がこの世界の戦いに慣れていないのもあるだろうが、それを差し引いても相当なものである。実際、初撃の速さには一瞬ひやっとした。

まぁ、それでも。奴には及ばない。

奴と比べる事が間違っているのかもしれないが、俺のしてきた戦いに比べればかなり楽な部類である事には変わりはない。

吹き飛ばされた身体を立て直すため、地面に手をつき無理やり身体を空中で転換させる。そのまま、四つんばいのような格好で地面を滑っていきながらも足に力を入れ何とか勢いを止める。

そんな俺にシグナムは驚きの表情を浮かべた。その表情は先ほどよりも少し色濃く見える。

「どうしましたよ？」

「いや、少し驚いただけだ。お前のその身体能力にな」

まぁ、確かに普通で考えればとんでもない体勢の立て直し方ではある。

そんな合間も束の間。直ぐにシグナムの剣が俺を襲う。それを受け止め、幾分か大振りのものではあるが次は反撃を一つ。

それは案の定容易く避けられ、更に無数の剣筋が俺を襲う。

そしてまたそれを危なっかしく避け、打ち合いながらまた思考する。

当初の俺の考えは彼女の攻撃を今みたいに危なっかしく防戦しながらも、何処かで隙を与えてあっさりやられるというプラン。

しかし、それは加減というか隙を与えるタイミングが中々難しい。仮にも防戦していたのに、余りにあっさりと隙を与えると彼女のような武人に近い人種には本気でないのが直ぐにばれる。

本当にギリギリ。防御があと一息間に合わなかったというぐらいの隙でなければならないのだ。

だが、彼女の予想以上の強さに少しだけ欲が出る。本来、目立ちたくもないし、もし相手が半端な強さならうっかり大怪我を負わせてしまう可能性がある事から“本気”を交えた動きはしないようにしていたのだが……

（これだけ強いなら一撃……いや四～五手はいけるな）

心の内で人知れず笑う。最近はご無沙汰だったんだ、少しでも本気を出せるなら儲け物だろう。

血が騒ぐ。口が乾く。訳もなく鳥肌が立つ。

大サービスだ。少しだけ見せてやろう。俺に内包された技術の一つを……

――――――――――――――――

「うそ……」

私は目の前で起こっている事を信じ切る事が出来なかった。

今、私はシグナム副隊長とあの男の人――雄大さんの模擬戦を見ている。

最初はなのはさんの言っている事も只の冗談だと思っていた。あの人には期待するほどの力はなくて、一分と経たずシグナム副隊長にやられてしまうだろうと半ば期待してさえいた。

だけど、目の前にあるのはそんな私の想像とは似ても似つかない光景だった。

シグナム副隊長の持つ剣の形を模したアームドデバイスは剣を使わないような私でも見惚れるほどに綺麗に力強い剣筋で宙を舞っていた。

そして、あの人――雄大さんは何の変哲もないナイフ一本でその鋭い剣筋と打ち合っていた。

シグナム副隊長の実力は耳にした事がある。何でも魔導師ランクで言えばニアSランク。並みの魔導師では相手にすらならない。

だと言うのに、魔導師として日も浅い次元漂流者が……まして魔法も何も使わず只の近接戦闘だけでシグナム副隊長の前に何分も立ち続けているのだ。驚かずにはいられない。

「シャーリー。ちゃんと雄大君のデータ取れてる？」
「はい。でも、デバイスも無しで何の魔法も使わずに生身でシグナムさんと打ち合うなんて……あの人すごいですね」
「うん。雄大君の武器はキャロみたいなレアスキルでもなく、かといってスバルやエリオのような魔法を駆使した近接戦闘でもない――」
そうあの人の武器はそんなものじゃない。もっと人間として根本的なもの。人間が誰しも持つ最低限の土台――
「ずば抜けた身体能力――それが雄大君の武器。その身体の使い方は、スバルやエリオみたいな前衛向きの戦いには実際の戦闘でも参考になると思うし、ティアナやキャロみたいな後衛型には相手の接近への対処の仕方も学べる。だから、皆を連れてきたんだけどね」
そう――身体能力。言うなればそれが雄大さんのレアスキルだろう。
確かに自分にあれほどの身体能力があれば、射撃のポジションも取りやすいし、もしもの対処も比較的簡単だろうと思う。
でも、あの人の動きを見て私は直感的にあの場には辿り着けないと

思ってしまった。

私の頭をよぎった言葉。

――天才。雄大さんのような人を本当の天才と言うのだろう。

比べて私はどうだろう。比べるまでもない私は凡人だ。確かにあの場には辿り着けないと思う。

でも、私はそんな事で立ち止まらない。私には私のやる事が……証明したい事がある。

天才だろうがなんだろうが、同じ場に立てなくとも限りなく近づく事は出来る。凡人の私に出来る事はそれぐらいだ。

そう。私は止まらない。いつか私の――ランスターの弾丸は何でも貫けるんだって事を証明できるまで。

なら、私に今出来る事は雄大さんの動きを少しでも盗む事。そう思って、しっかりと二人の打ち合いに目を向ける。

状況は今だに変わらない。シグナム副隊長の再三の攻撃に雄大さんは持ち前の身体能力で打ち合っている。

しかし、どちらかと言うと雄大さんの方が防戦一方。さすがに身体能力が高いからと言っても、やはり勝つのは難しいのだろう。反撃もシグナム副隊長の攻撃十回毎に一回と言った具合だ。

このままだと時間の問題だろう。雄大さんの表情も苦しそうなものになってきている。

後何分保つだろうと、完全に外野気分で雄大さんの表情を見ていると……

「……笑った？」

不意に雄大さんが笑った気がした。表情に変化は無かった。なのに、どうしてそう感じたのだろう。

不思議に思っていると、唐突に打ち合いの音が止み、雄大さんとシグナム副隊長の距離が離れていた。

――――――――――――

何度目かの剣筋を受け止め、強引に振り払う。

「くっ！」

この日初めて苦々しい声を発して彼女は後ろへと距離を取る。

その距離を確認して、俯いた状態でその場で直立する。頭の中に渦巻くのは起爆剤。昔に体験した魔術師との殺し合いの数々を思い出す。

殺しという行為を正当化する為に奴への憎しみで自分を満たす。身体の全てをスイッチが入った時の自分に切り替える。

ただ、今回はあまりに露骨だとばれる可能性があるので少しだけ。しかし、この少しだけがいつも以上にきつかった。

爆発したがる起爆剤（にくしみ）達が脳内で暴れに暴れ、気を抜くと理性が瓦解して一気にトリップしてしまいそうになる。

苦しいだけの麻薬をやっているようだ。際限なく脳内に表れ、騒ぎ、鎮圧されていく――その繰り返し。

その状態でシグナムに視線を向ける。全ての感覚が冷たく冷えきった中で彼女だけが唯一温かく映っている。

それがどうしようもなく気持ち悪い。バランスが悪すぎる。

俺の身体はそれを修正しようとする。さて、頼むから殺されないでくれよ。

「……っ！！」

俺の変容した雰囲気にシグナムは視線に鋭さを増す。それを意に介さず俺は右手に持つナイフを投擲した。

「くっ！　レヴァンティン！」

〈Ｐａｎｚｅｒ　ｇｅｉｓｔ！〉

瞬間、シグナムの身体が淡い桃色の光を纏う。ナイフはそれに弾かれ、真上に放り出される。

「ー……」

俺は既にその場から飛び出していた。位置するのはシグナムの真上。

「二……」

シグナムの上を後方宙返りの要領で飛び越えながら弾かれたナイフを掴み、シグナムの顔に突き出す。

しかし、それも桃色の光に阻まれ彼女の顔の前で静止する。

直ぐにナイフを引っ込め、物理法則に従い、彼女の後ろに背を向けて着地。地面に這うような姿勢のまますかさず身体を時計回りに回転させ、彼女の足を払いにかかる。

「うぁっ！」

反応できなかったのか、足を綺麗に払われ一瞬宙に浮くシグナム。そして、俺はそのまま勢いを殺す事なく回り……

「三！！」

残った左足を飛び上がりながら彼女の横っ腹に叩きつけた。

桃色の光のせいでやたらと堅かったが、空中では踏ん張りようもないし、手段はあっても不意のこれには反応できないだろう。

彼女はそのまま勢い良く瓦礫の山に激突した。

轟音を上げ、煙を上げる着弾点ならぬ着人点。俺はその間に息をゆっくり吐き、呼吸を整える。

しかし、彼女……最後の一撃を腕で防いでいた。反応ができなかった訳ではないらしい。

まぁ、そこまで気が回ったのなら大丈夫だろう。取り敢えず喜んでるそぶりを見せる為に軽くガッツポーズ。

予想でしかないが、見学連中は呆然としているだろう。何せド新人が部隊の副隊長ぶっ飛ばしたんだから。

それにしても……えらく時間がかかるな。まさか、気絶したりしてないよな。いや、加減はしたから大丈夫だと思うけど……

「……レヴァンティン。カートリッジロード」

〈Ｊａｗｏｈｌ！（了解！）〉

「……何今のガシャンって音。それにやたらとカッコいいそのドイツ語は何よ。無茶苦茶嫌な予感がするんですけど……」

いや、言いたい事は分かる。今まで本気出すとか、さんざカッコつけてたくせにいつものアホに戻るのが速いしあっさりし過ぎてるって言うんだろ？

だがそれも仕方ない事である。およそ剣から聞こえるはずのない、何かがスライドするような音が聞こえてきたら、誰だってビビるに決まってる。俺は少なくともそう信じている。

〈Ｓｃｈｌａｎｇｅｆｏｒｍ！〉

一気に冷めた俺をよそに再び機械的なそのドイツ語が聞こえてきた瞬間……

「うわっ……！！」

何かが蛇のようにこちらに伸びてきた。真っ直ぐ伸びたそれを何とか避けるが、その伸びてきた何かは意思を持っているように俺の周りを回りだし、あっという間に俺を縛り上げた。

「これは……鞭？　剣の鞭か」

「動くなよ。動けば、お前の身体がバラバラになる保証があるからな」

「嫌な保証だなオイ！？」

物騒な事を言うシグナムに思わずツッコム。

しかしまぁ、終わりは意外と呆気なくと思ってはいたが、こうもあっさりしていると無性に悔しく思ってしまう。

「それで……どうする？」

「どうもこうも八方塞がり、詰み、降参だって。こんなのどうしようもない」

俺は両手を上げ、降参だと自分の意思を示す。すると、俺にまとわりついていた剣達がゆっくり俺から離れ、シグナムの元でもとの剣の形に戻った。

「はい、そこまで。二人ともお疲れさまでした」

なのはの声が演習場に響く。まぁ、当初の予定とはかなりずれたものの結果は同じなのだ。こんなものと言えばこんなものだろう。

「ありがとうございました。わざわざ俺の為に時間を割いてもらって」

「なに、主の命令とは言え私が進んでやった事だ。気にする必要もない」

そう言って、いつの間にか甲冑から管理局の制服に戻ったシグナムは俺の横を通り、もの言わず見学場所へと歩いていく。

その後を追うようにシグナムから二～三歩ほど離れて俺もゆっくり歩いていった。

――――――――――――――――

「お疲れさんや二人とも」

ビルの屋上に戻ると、八神からの労いの言葉に出迎えられる。

取り敢えずこれでやる事も終わり、少しはゆっくりできるだろうと思ったのも束の間。ナカジマを含めたフォワード部隊がわらわらと俺の周りに集まってくる。

「すごいですよ雄大さん！　シグナム副隊長と渡り合っただけでなく、一撃当てるなんて！」

赤髪の少年が興奮したように俺に詰め寄ってくる。

「あ～、まぁ負けるのは分かってたしあんなのまぐれまぐれ」

「そうだとしてもすごいです。魔法も無しにあそこまで動けるなんて」

「やろうと思えば君でも出来るよピンクのお嬢さん。あれはそこまで難しい事じゃない」

「いや、さすがにあそこまでは無理ですよ」

ナカジマが苦笑しながらそんな事を言う。……確かにそうか、欲を言うならあまり俺の動きを参考にして欲しくはないし、無責任に期

待を持たせるのも良くない。

「そういえば、雄大さんは一応フォワードメンバーの一人なんですよね？」

「そうだよ。オレンジ頭」

「すごく不名誉な呼ばれ方なんですけどそれ」

オレンジ頭の少女はその呼び方が気に入らなかったのかジロリとこちらを睨んでくる。怖いなこの子。

「仕方ないだろう。名前知らないんだから。それに皆髪の色が鮮やかすぎて鮮やかすぎて……そこの赤髪の子とナカジマの間にフェイト挟めば信号だぞ信号。頭で交通規制できるぞ。そんな特徴を呼び名に使わないのは勿体ないとは思わないかね。オレンジ頭君」

「調子乗ってると頭打ち抜きますよ」

「ちょっ……何、何なの君？　そんなにさらっと物騒な事何処で覚えて来たの？　あれか最近流行りのツンデレか君は」

「……クロスファイヤー……」

「ストップストォォォップ！！　悪かった。悪かったから何かその周りに出てるオレンジの弾丸っぽいのを消して下さい！　年齢は違えど未来の同僚なんだよ！？　夢膨らむ俺の将来の可能性を容赦なく叩き潰すつもりか！」

「安心して下さい。同僚じゃなくてライバルですから」

「若い芽は先に潰しておくってか！？　年下の女の子にそんな事されるとは思いもしなかったよ！」

「ティ、ティア～。取り敢えず落ち着こう、ね？」

躊躇なく銃を突き付けてきたオレンジ頭をナカジマが宥める。不満げな気持ちを拭いきれないのか、オレンジ頭は渋々ながらも銃を下げる。

「……ティアナです」

「イグアナ？」

「ティアナです。私の名前。ティアナ・ランスター。何ですかそのイグアナって……」

「此処に来てまさかのカルチャーショック！？」

どうやらこのランスターという少女。俺の発言を真面目に取るのが馬鹿らしくなってきたのだろう、軽ーくスルーして見せた。

いやはや人の成長は早いものである。

「あ、僕はエリオ・モンディアルです。よろしくお願いします雄大さん」

「モンブランね、覚えた覚えた」

「ち、違います！　モンディアルです！」

ランスターの自己紹介に便乗して、赤髪の少年――モンディアルも名乗る。まぁ、モンブランは自分でも強引だった気がする。

それにしても、最近はボケも担当するようになってきたな俺。

「じ、じゃあ、私も……キャロ・ル・ルシエです。よろしくお願い

します」

「あぁ、よろしくルシエちゃん」

「キャロだけ普通！」

「馬鹿野郎モンブラン！　こんな純粋そうな子困らせるのは可哀想だろうが！！」

「普通に僕達に失礼ですよ！」

モンディアル――思わぬツッコミ伏兵である。

「まぁ、取り敢えずナカジマにランスター。モンディアル、ルシエだな。これから色々足引っ張るかもしれないけどよろしく頼むよ」

そう言って軽く微笑む。さて、挨拶は済んだ。これからは彼女達と同期になるのだ。奴を見つけるまで……どれだけの時間があるかは分からないが、上手くやっていけるようにしよう。

――――――――――――

「主はやて。少し宜しいですか？」

「ん？　シグナムどないしたん？」

模擬戦が終わり、フォワード陣に囲まれる高橋を見て、主にひっそりと話しかける。

主は当然のように少し不思議な顔でこちらを見ている。仕方ない。いきなり神妙な面持ちで話しかけられれば誰だろうと不思議に思う。

（あまり大きな声で話せる事でもありませんので、ここからは念話でお願いできますか？）

（かまへんけど……どないしたんシグナム。まさか、どっか怪我したんか？）

（いえ、怪我はありません。吹き飛ばされた時は防御魔法で身を守っていましたから）

そう、私が伝えたい事はそんな事ではない。第一、怪我をしたなどと言えば主を心配させてしまう。わざわざ主に手間をかけさせては守護騎士の名折れと言うものだ。

（お伝えしたいのは高橋の事なのです）

（雄大君？　雄大君がどないしたん）

そう聞かれて少し躊躇う。私もこの部隊の副隊長。これから共に戦う仲間としてはこんな事は言いたくない。

しかし、言わねばなるまい。もし……もし私の思った事が本当ならば高橋は何かとてつもない事を隠している可能性がある。それも周りに危機が及ぶほどの……だ。

（私が高橋に吹き飛ばされた時、あの時私は彼から尋常じゃない物を感じたのです）

（尋常じゃない……具体的にはどんな？）

（一言で言えば……殺気です）

（殺気？）

（はい。私の勘違いかもしれませんが、あの時私を襲った重圧は……丸で得体のしれない何かの口の中に入るようでした。気を抜けば、飲み込まれて二度と戻ってこれないようなそんな感覚）

（続けて）

いつの間にか主の顔は真剣になっていた。顎に手を添え何かを見据えるような瞳でじっと考えを巡らせている。

（殺気と言うものにも種類があります。濁りがなければ何かを目的とした物、濁りがあればただおぞましい物。しかし、高橋のそれは……黒くおぞましいものであったのに何か悲しげなものを感じました）

（私は武道とかそんなのに詳しくはないから分からんけど……騎士の直感ってやつかな）

（はい。まぁ、あくまで直感ですのであまり気になさる事もないでしょうが……高橋は少々危険な人物かもしれません。それを頭の隅にでも置いていただければと……）

私が伝えた内容に主は目を瞑り、深く考えている。しかし、それも束の間。直ぐに顔を上げる。

（あかんよシグナム。雄大君はこれから一緒に戦う仲間や。こっちが信用したらんと、信用もしてもらえへんで）

（はい……すいません）

（まぁ、実を言うとな私も雄大君は何か隠してるな～とは思っとたよ。けどな、それは多分私達を何かに巻き込まんようにしてるんちゃうかと何でか思った。理由は無いよ？　只の勘。でも、雄大君が何を隠してるとは言え、私は雄大君を信じたい。それに信じとったら何時か雄大君も話してくれるかもしれんやろ？　正直、指揮官兼部隊長としてはあんまり誉められん考えやけど）

その主の言葉に私は思わず微笑む。

（……何笑っとるんよシグナム）

（いえ、主が何時もの優しい主で安心しました）

（何か含みのある笑いやね）

そう言って、少し不機嫌になる主。主は何時も通り優しいお方だ。

今日もそれは変わりないらしい。

なら私も主の意思通り、彼を信じてみるとしよう。彼が何を隠していようとも、彼の口から話される日までそれを待ってみよう。

そうして、ふと高橋の方を見る。高橋は何故かティアナに銃を突き付けられ、必死に謝罪している。

丸で別人だと高橋を見ながら妙に可笑しくなって頬を緩ませる。

見上げた空は何処までも澄んでいて、限りなく遠くを見渡せた。それはこれからの行く先を暗示しているようで、この空を曇らせる事がないように私は此処で精一杯の事をすると人知れず心の内で誓ったのだった。

ファーストアラート（前編）（前書き）

前回の更新からまたもや大分日にちが経ちました。

更新は大体十日に一回ぐらいのペースを心掛けるようにしていますが、時にはそれ以上かかる場合もございますのでご了承ください。

また、指摘・訂正・感想などはいつでもお待ちしています。辛口批評も遠慮なくお願いします。

では、続きをどうぞ。

ファーストアラート（前編）

この始め方は何度目になるのか……あれからまた約二週間が経った。

俺は語り手としては余りにお粗末らしい。毎度毎度こんな切り口でしか語り始める事が出来ない。

でも、仕方がないだろう。今に至るまでこれと言った出来事がなかったのだから。語るべき何かがない限り、俺は何にも出来ないのである。うん、つまり俺じゃなくそういう話題を提供しない世界が悪い。

自分で思っておいて何だがずいぶんとスケールのでかい責任転嫁である。本当、人間って小さいですね～

……一先ず自分でも何言ってるか分からない愚痴はここまでにして、今俺が何をしているかと言えば……

「は～い、整列！」

演習場に響くなのはの声に俺を含む五人――通称フォワードメンバーは全員が肩で息をしながら横に一列に並ぶ。

俺達は今早朝訓練の真っ最中だ。基本的に俺達フォワードメンバーは朝、昼、夜と一日中訓練漬けの毎日を送っているので、今は一日の始まり部分をちょうど過ごしている事になる。

しかし、この訓練の密度はかなり濃い。朝からこなすにはかなりの運動量で内容も一日の始まりとは思えないほどハードな物だ。

俺はやっていた事がやっていた事だけに体力にはそれなりの自信があった。だが、今の俺は完全に息が上がっている。

俺が元来持久力がないだけかもしれないという非常に傷つく見解を除けば、この訓練のきつさが十二分に分かってもらえるだろう。

「本日の早朝訓練ラスト一本。皆、まだ頑張れる？」

「「「「「はい！」」」」」

「じゃあ、弾丸回避訓練（シュートイベーション）をやるよ。レイジングハート」

〈Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．　Ａｃｃｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ〉

なのはの左手にある杖型のデバイス――レイジングハートから機械的な女性の声が聞こえると同時に宙に浮いているなのはの足元に魔方陣が浮かび上がる。

それが淡く光りだしたと思うと、彼女の周りに無数の桜色の弾丸が現れ、まるで各々が意思を持つかのようになのはの周りを高速で飛び交い始めた。

「私の攻撃を五分間被弾なしで回避し切るか、私にクリーンヒットを入れればクリア。誰か一人でも被弾したらまた最初からやり直しだからね。頑張っていこう！」

要は当たらずに一発入れればクリアと言う事か。単純そうに見えてその実かなり難しいものだ。

何せあの弾丸――アクセルシューターと呼ばれる魔法は発動者の思いのままに軌道を変更できる。

もちろん、その操作にはかなりの集中力が必要なのだが、やろうと思えば対象を追尾し続ける事だって可能という何とも面倒くさい魔法なのだ。

更になのはに限らず、魔導師はほぼ全員が防御魔法を習得している。例えアクセルの雨を抜けたとしても、単調な攻撃ではあっさりと防がれてしまう。

更に更にもう一つ。これはなのはではなく俺達に関する事だが……

「こんなボロボロ状態でなのはさんの攻撃を五分間……捌き切る自信ある？」

「ない！」

「同じくです！」

ランスターの問いかけにナカジマとモンディアルが自信満々にそう答える。

「雄大さんは？」

「無理だ……さすがに今の状態じゃあな」

出来ない事はない。しかし、それは成功する確率で言えば半分にも満たない分の悪い賭けだ。

そんな不安定要素を残すぐらいなら、意地も何も切り捨ててすっぱりとこう言うべきだろう。ナカジマもモンディアルもそう思ったからこその言葉だろう。

そうでなければ只の腰抜けである。

「じゃあ、何とか一発入れよう！」

「はい！」

ランスターの方針にルシエがはっきりと返事をする。俺達もその方針に異論はない。

ランスターはこの中ではかなり頭の回る方だ。彼女は射撃や狙撃を主とする遠距離型のポジションという事もあり、全体的な把握能力とそれに付随する判断速度が異様に高い。

機動六課が設立してから約二週間続いた訓練の中で、彼女はその持ち前の才能とも呼べる力でフォワード部隊の指揮官的存在になりつつある。

そんな彼女が決めた方針だ。俺達の中に異論を唱える者はいないだろう。

まぁ、この方針に穴があると言えばあるのだが……曲がりなりにもこれは訓練だ。その多少の選択ミスをする事自体もいい経験になるに違いない。

「行くよ！　エリオ！　雄大さん！」

「はい、スバルさん！」

「ま……足手まといにならないように努力させてもらうよ」

そう言って前衛型のナカジマ、モンディアル、俺はそれぞれの武器を構える。

ナカジマは右手にはめられたグローブ型のデバイスリボルバーナックルを。

モンディアルは槍に酷似した長柄のデバイスストラーダを。

そして、俺は何時ものように何の変哲もないナイフを。

「準備はＯＫだね。それじゃあ……」

なのはが右手を振り上げる。瞬間、緊張が身体中を駆け巡った。俺達は全員視線を鋭くし、握っている手に力を込める。

「レディー……ゴー！！」

そして、そんな緊張が解ける間もなく、合図と一緒になのはの右腕が振り下ろされ、桜色の弾丸が容赦なく俺達に襲いかかった。

――――――――――――――――――――

「つ～～か～～れ～～た～～」

「そうですね。今日は一段とハードでした」

そして、時は過ぎる。何だか語るべき所をえらくぶっ飛ばしている気がしないでもないが、そこは何か良く分からん事情を皆さんの広い心で差し障りなく解釈してもらいたい。はい。

まぁ、簡潔に言えば早朝訓練のラスト一本を二週間ほどでそれっぽくなってきたチームワークで何とかクリアし、休憩も兼ねて只今フォワードメンバーはシャワーを浴びて一段落中である。

そして、俺とモンディアルは早々にシャワーを浴び、階段で未だにシャワーを浴びているであろう女性陣を待っている訳だ。

因みに先の台詞。最初に子供が駄々をこねるように情けなく弱音を吐いているのが俺で、それにしっかり受け答えしているのがモンディアルである。

「それにしても……実戦用のデバイスに切り替えなんて今から楽しみですね！」

「あ～、そうだね。楽しみだね」

モンディアルが言ったのは今朝の訓練でなのはが言い出した事だ。

あの訓練の後、ナカジマが何時も移動に使っているローラーブーツがオーバーヒートを起こし、更にはランスターのアンカーガンとやらもかなり厳しい状態である事をきっかけに、訓練に慣れてきた事も考慮して実戦用の新デバイスに切り替えるとの事だった。

それは楽しみに違いない。実戦用に切り替えるという事はこれまで以上に強くなれ、自分達自身の成長の証でもあるのだから。

しかし……

「あの……もしかしなくても自分だけデバイスを持ってないから不機嫌になってる……なんて事ありませんよね」

「よ～く、分かってんじゃねぇかモンブラン。なら、お前のストラーダ俺によこせ」

「な、何言ってるんですか！？　それに雄大さんはナイフ使いじゃないですか」

「いや、今の俺ならいける気がする。あまりの理不尽さに俺の眠っている才能がピキーンと覚醒した気がする。うん、絶対そうだ。そうに違いない」

「いや、仮にそうだとしても嫌ですよ」

「というわけでくれ」

「会話する気あります！？」

とまぁ、自分のツッコミ要因としての立場を忘れ、完全にボケの立場に立っている訳だが……

最近ではこんな会話も割と普通になってきている。他愛もない馬鹿な事で笑い合えるそんな普通の会話。

それは俺が心の底で望んでいた事なのかもしれない。いや、現実にそうなのだろう。

けれど、それは同時に俺の本質を悟られたくないが為の行動でもある。前にも言ったが、俺は被害者ぶって自分を正当化して生きてきた人間だ。

自分のやる事は被害者としての特権である。どんなに酷い事も被害者である俺の気持ちを考えれば仕方のない事である。

そうやって平然と力だけを求めるなんていう蛮行を続けてきた。自己中の塊みたいな存在。

しかし、他人にはそれを知られたくない。

要は意固地になっているだけだ。俺は基本アホで間違っている道でも感情の傾くがままに突っ走る。そんなみっともない姿を見せたくないだけの子供そのものである。

「冗談だよ冗談。まぁ、俺みたいなド素人がポンポン次の段階に登っていけるとも思ってないし」

「そう言ってもらえて助かります本当に。……それにしても遅いな……皆」

「女性はこういう時には時間がかかるんだよ。風呂、身仕度、買い物。女性が時間かける事柄ベスト3だ。テストに出るからよく覚えとけよ」

「はい」

まぁ、基本アホなのは今の俺でも変わらない。むしろ、アホという言葉をしっかり言葉通り受け取るのであればこちらの方が重症なのかもしれない。

そうして待つこと数十分。女性陣がようやく姿を現した。全員が管

理局の制服に身を包み、さっぱりとした顔で隊舎のロビーに向かう。

「そういえば雄大さん」

「ん？　何でございましょうか」

軽く談笑しながら隊舎の中を歩く途中、ランスターが唐突に俺に何か聞きたそうに声をかけてくる。

「あの……大した事じゃないんですけど、雄大さんナイフ使いますよね」

「使うね」

「ナイフを使う理由とかって……あるんですか？」

「理由？」

まさか、そんな事を聞かれるとは思わなかった。確かに大した事ではないがそれを聞くタイミングは今この場でなきゃならないのだろうか。

「はい。私やスバルは訓練校に入る前から独自の戦い方が既に確立してましたから、デバイスもオリジナルなんですけど……そういうオリジナルの戦い方を確立してる人の中で、ナイフを使う人なんていうのは聞いた事もないですし、ちょっと気になって」

「まぁ、オリジナルのデバイスなんて持ってる人が少ないからっていう理由もあるんですけどね～」

ランスターの言葉にナカジマが間延びした声で補足する。なるほど、その理由なら頷けるか……

「まぁ、理由なんて大層な物はないけど……強いて言えばルシエちゃんと同じかな」

「私ですか？」

「おう。ルシエちゃんの家系は竜召喚師っていう特殊な魔法を使う家系なんだろ？」

「はいそうです。家系と言うよりは一族っていう単位ですけど」

ルシエちゃんはそれが何かというように小首をかしげる。ルシエち

ゃんは今出てきたみたいに竜召喚師という少し変わった魔法の使い手なのだが……その事はまた後で。

「つまりは昔から伝えられた伝統ってこと。ルシエちゃんの竜召喚みたいに俺の家系には昔から受け継がれ続けている武術……みたいな物がある。それの主体がナイフ――短刀ってだけの理由だよ」

「そうなんですか……」

それを聞くなりランスターは何処か塞いだような雰囲気で視線を落とす。

「え～と……今の答えじゃ不満？」

「いえ、ただ少し私が期待し過ぎてだけですから」

「つまり不満なんでしょ！？　何でそんな遠回しに言うの！　ルシエちゃん！　ランスターさんが何か怖いです！　助けて！！」

「えっ？　えっ！？　えっと……あの……」

「雄大さん。キャロを巻き込んじゃ可哀想ですって。ティア～何怒

ってんの～」

「……別に怒ってないわよ」

言葉とは裏腹にますます不機嫌になっていくランスター。えっ……何？　俺、マジで何かした？

ランスターは不機嫌そうなままさっさと歩いていく。それをナカジマが走って追いかけていった。

その様子を俺はその場で立ち尽くしたまま見送り、口を開く。

「ルシエちゃんルシエちゃん。俺何か悪い事したかな？　女の子目線からの意見をお願いします」

「えっと……雄大さんの言葉のイントネーションが嫌だった……とか？」

「どうしようもねぇよ！　全否定じゃん！！」

何だか妙に真実味のあるその意見にむなしくもそうツッコムしか出来ない俺だった。

――――――――――――

「ティア〜、待ってよ〜」

スバルの声が耳に入ってくる。普段なら立ち止まって、待ってやるぐらいの事はするのに今は何だかそんな気になれなかった。

「何よ。さっさと行くわよ」

「ねぇ、何でそんな怒ってるの？」

「……怒ってないわよ」

「嘘。絶対怒ってる」

「何でアンタにそんな事分かるのよ」

「分かるよ。だって、訓練校時代からずっとコンビ組んできたんだもん」

スバルは私の言葉に迷う事無くそう答え、私の顔をじっと見つめていた。

こういう時のスバルは苦手だ。決まって私が隠し事をすれば、こうやって何かを見抜こうと真っ直ぐ視線を向けてくる。

それに何時も私は負けて最終的には本音を吐いてしまうのだ。

「理由が……無かったのよ」

「……理由？」

それは今回も変わらなかった。そのスバルの純粋な視線に思わず口を開いてしまう。

「……雄大さんの動きを見て何時も漠然と感じてた。あの動きは私達に真似出来る物なんかじゃない。真似しちゃいけない物なんだって……」

そこまで言って後ろを少し振り替える。こんな話を本人に聞かれれば色々と恥ずかしい。そう思って雄大さんの位置をさりげなく確認した。

雄大さんはエリオとキャロと何か話しながら、何時もの様に時折大声で叫んでいる。

その様子に少々安心し、戸惑いながらも続きを口にする。

「でも……何でそう思ったのか自分でも分からない。だから、雄大さんにナイフを使う理由を聞いた。きっと、そこに私がそう思うようになった原因があるんだって期待して……だけど、実際は何も無かった。それが腹立たしくてたまらないのよ……こっちは真剣に考えてたのに本人は何時もの様におちゃらけて――！」

最初に口を開けば、後は止まらなかった。まるで決壊したダムから次々と水が溢れる様に言葉が湧き出てくる。

「えと……つまりティアはその理由があって欲しかったって事？」

「あって欲しかったって訳じゃないけど……」

「でもさティア。どうしてそんなに雄大さんの事が気になるの？」

「えっ――？」

スバルのその言葉に私は思わず惚けた声を出してしまう。

「……何言ってんのよ。私はただ自分の考えがはっきりしなかった

のが嫌だっただけで……」

「うん。だからさ、何で雄大さんの事をそんなに考えるの？」

そこでスバルの言わんとする所が分かった。そうだ……私はどうしてあの人の事を考えて腹なんか立てているのだろう。

もし、私の先の言葉通りなら別に対象は雄大さんではなくエリオやキャロに対してもそうでなくてはならないはずだ。

まだあの二人の事を全て知っている訳ではない。むしろ知らない事の方が多い。

だと言うのに、何故あの二人には今の様にイラついたりしないのだろう。

よくよく考えればさっき何故雄大さんが離れていて安心したのか……

本人にこの話を聞かれると何故恥ずかしいのか。

気が付いたのは矛盾。

自分の考えをはっきりさせたいなら、強引にでも聞き出せばいい。けれど私はそれをしたくない。

自尊心（プライド）が許さないから？　理解もしてない彼の事情に同情しているから？

違う――違う。そんな簡単な感情じゃない。もっと言葉では言い表わせない様なむしゃくしゃした思い。それが私を邪魔しているのだ。

「別に……仮にもこれから一緒にやっていく仲間なんだし、知りたくなるのも当然でしょ」

「ふ～ん……取り敢えずさ、後でちゃんと仲直りしとかないとね」

「……そうね」

スバルの言葉に何とも煮え切らない返事をして歩調を早める。ただ私はいち早くこの場から逃げ出したかった。ただあの人と顔を合わせたくなかった。

私が何で雄大さんの事を考えていたのかは分からないけれど、こんな話は間違いなく恥ずかしい話だ。それだけは混乱している頭でも理解出来た。

私は今どんな顔をしているのだろう。

そんな自分でもよく分からない事を考えながら私は先を急いだ。

ファーストアラート（後編）（前書き）

お久しぶりです。約四ヶ月ぶりの更新です。

取り敢えずは高校も卒業し、進学先も決まりましたのでこれから更新再開していきたいと思います。

更新はこれからも不定期になるでしょうが、どうかよろしくお願いしますｍ（＿＿）ｍ

でば拙い文ですがお楽しみ下さい（＾＿＾）／

ファーストアラート（後編）

その後、何とも納得出来ない心持ちのまま六課のロビーに集合。そして、そこで待っていたなのはに連れられ俺達は一路メンテナンスルームへと移動した。

メンテナンスルームは主にデバイスの管理、調整を行う部屋でそこではデバイスを専門としたメカニックスタッフが昼夜を問わず設計、開発、研究と日々忙しく働いている。

隊長陣や前線メンバーのデバイスは個人で調整したりする事も勿論可能であるが、やはり細かい部分までとなると専門的な知識や技術が必要となってくる。

更に言えばデバイスは人工知能を搭載したインテリジェントデバイスに始まり、人工知能を搭載せず処理速度の速さを主とするストレージデバイス、ベルカ式のアームドデバイス、融合型デバイス等種類も様々。

必然的に必要となる知識も増えるため個人の調整では限界があるのだ。

そこでデバイスの調整を主とするメカニックスタッフ――通称デバイスマイスター達の出番となる訳である。

という事で、“俺”を除くフォワードメンバーの実戦用デバイスを受け取る為にここに来た訳だが、はっきり言おう暇である。

そりゃそうだろう。こっちはデバイスなんてものを所持してない上に、欲しがった所でそうほいほいと作れる物でもない。

説明を軽く聞いてはいるものの、デバイスに関しては話を聞く限り俺にはあまり必要のない知識である。

確かにこの世界の魔法（ちから）を制御する点において重要な要因（ファクター）であるのは否定できないが、それ自体は何の事はないただの機械なのだから。

そんな半ばふてくされた気持ちで、他の四人がメカニックスタッフのシャリオ・フィニーノ――愛称シャーリーの説明を受けているのを少し離れた場所で壁にもたれかかりながら見ている。

そのまましばらく経つと不意に何かがフォワードメンバーの元に飛んでいった。

その正体は青い髪に管理局の制服を来た人形みたいな小さな人型。赤いチビすけヴィータに続く超人家族八神家の一員その二ことリィンフォース？（ツヴァイ）空曹長である。

何であんなちっこい人が普通に喋って浮いているかと言うと、実は彼女ああ見えてデバイスの一種であるそうな。

ベルカ式の融合型デバイス。詳しい事は分からないがそういう事らしい。

デバイスだと言っても、やる事なす事は全て人間と同じだし、あの姿も魔力の浪費を抑える為の省エネ状態のような物とのこと。

省エネどころかほとんどエネルギー使っていないのではないかと言いたくなるが、その身を削っての省エネ精神は昨今の人類に欠けている物だと俺は思う。

言うなれば彼女は人類が忘れかけている節約の心そのもの。あれだ節約妖精だな、うん。

妖精と言う以上、その姿はすこぶる愛らしい訳であって更には夢を見せてくれるような存在である訳だ。

それは万人が頷くであろう妖精へのイメージであり、そのイメージは老若男女に精通する普遍の真実と言っても過言ではない。

そして、その憧れともとれる妖精へのイメージは人として生まれた

俺達にさらなる夢を見せ、際限なく魅了する。

加速する甘美な夢に徐々に自己の崩壊が始まる。理性は瓦解し、常識は砕かれ、恐怖は意義を無くす。

自分を抑えられず、その身体はうち振るえ、今この瞬間を持って全てを吐きださんと脈動する。

――――つまり、何が言いたいかと言うと……

「今日こそお前の身体に着いてる粉を浴びて、大空に羽ばたいてやるぞティンカーベルゥゥゥゥゥゥゥ！！」

「だからリィンはティンカーベルじゃないですー！」

俺はリィンフォースをこの上なく愛していると言う事である。

――――――――――――――――

「ねぇ？　雄大君」

「はい、なんでしょうなのはさん」

「いつも言ってるよね？　リィン曹長を見るなり抱き寄せようとしないように――って」

「はい」

なのはにバインドという拘束魔法をかけられ、そんなに広くないメンテナンスルームで正座をさせられ、真上から思い切り冷たい視線を浴びせられているのは、間違いなくこの僕――高橋雄大三等陸士です。

今の流れについて来れた人はごく少数だと思うので、この場を借りてご説明させて頂くと……

まず、俺はリィンフォースをこの上なく愛しています。好きとか嫌いとか恋愛感情とかでなく愛しています。

その為にリィンフォースを見た瞬間、俺の愛のボルテージがメーターを振り切ってしまった為に俺暴走状態に移行。

焦るフォワードメンバー達、逃げ惑うリィンフォース、唖然とするフィニーノ。

そんな所に我らがエースオブエース高町なのはさん登場。

暴走した俺をバインドで縛り上げ、鎮静剤（頭への本気一歩手前の衝撃）を打ち、今に至る。

「いつも言ってるにも関わらず……何で毎回同じような事になるのかな？」

「それはその……愛の為せる所業と言うか、子供の頃から追い続けた夢への渇望の結果と言うか……」

「何にせよ反省はしてないんだよね？」

「反省してなかったら未だに暴れてますよ……」

こんな八方塞がりな状態に身から出た錆とは言え、情けなくも首を縦に降る事しか出来ない俺の姿は自分でも別人のように思えてくる。

この世界に来る前に殺し合いなんてしていた人物と同一存在だとは

誰も思わないだろう。

逆に言えば、それだけ日常に溶け込む事は出来ている証明にもなるのだが……これを日常と呼ぶには些かどころか素晴らしく抵抗がある。

「うー、怖かったですー」

「大丈夫ですか？　リィンさん」

安心しながらも、何処か疲れたような顔でため息をつくリィンフォースをルシエちゃんがやんわりと気遣っているのを横目に見ながら、俺はただひたすらに頭を垂れ続けた。

「えっと……そ、そうだ！　実は今日は雄大さんにもプレゼントがあったんですよ！」

そんな微妙な空気に耐えきれなかったのか、フィニーノが何とかこの状況を打開しようといつも以上に声を張り上げてそんな事を言った。

「プレゼント？」

その言葉に俺は単純に疑問を抱く。今このタイミングで出てくるプレゼント等どう考えても思い付きはしない。

「はい！　だからなのはさんも取り敢えず抑えて抑えて……」

「駄目だよシャーリー。雄大君は早めに叱っとかないと何が悪かったのか分からなくなるから」

「そこまで子供じゃねぇよ！！」

それでも尚引き下がる気配のないなのはさん。フォワードメンバーなんてさっきから部屋の端の方に退避してる始末。

もう泣きたくなってきた。

「じ、じゃあそのままの体勢でお披露目と言う事で……」

「どう考えたってプレゼント受け取る姿勢じゃねぇよ！　よくこのまま事を進められるな！」

「……じゃあお披露目で～す」

「無視してんじゃないよフィニーノさん。あれか？　こんな訳分からん奴は相手するからますます話がずれるのであって、それならこっちで勝手に話を進めた方が楽だと言う結論に至った挙げ句のガン無視ですか？　いいの？　そっちがその気なら俺とことんまで喋り続けるよ？　一週間ぐらい俺の声聞きたくなくなるぐらいに深層心理（ナル）に刻みこんじゃうよ？」

そんなうざいとしか思えない行動を続ける俺だったが、突然顎下に見覚えのある赤い球体をあしらった杖が突き付けられる。

「雄大君？」

「すいません！　なのはさん！　何でもしますから！　何でもしますから、今の行動は見逃して下さい！　今のは反省してないからとかでなく、俺の……俺の本能なんです！　そろそろ俺もいい歳だからこういうキャラは卒業したいよ。したいけれども、長年かけて身体に染み付いた本能はどうしようもないんですぅぅぅぅ！！」

もういい加減に直ぐ頭下げるのを止めろよ俺。と自分で自分を諌めるもののそれには全くもって意味はなし。この世界に来て何度目かも分からない安い頭を情けなく下げるのだった。

「はぁ……もういいよ。何でも私の言うことを一回聞いてくれる権

利ももらった訳だし。これ以上やってると話が進まないしね」

俺のそんな様子になのはがため息をつきながらそう言うと、俺を縛っていた桜色のバインドが溶けるように消える。

それと同時になのはのレイジングハートも待機状態の宝石に戻った。

「取り敢えず……終了でいいですか？」

「うん。取り敢えず……ね」

「ご迷惑おかけしました皆さん」

フィニーノの言葉に何やらものすごく含みのある答えを返すなのはだったが、それを言えばせっかく落ち着いた状況をまた蒸し返す事になるので素直に謝る。

「じゃあ改めまして雄大さんへのプレゼントのお披露目です」

フィニーノがそう言って、何処からか両手にちょうど収まるサイズの長方形の箱を取り出す。

蓋を取り、中身を見た瞬間――

身体が震えた。

「これって……ナイフですよね」

中身を見たエリオが口を開く。

そう中身はナイフだった。黒塗りの鞘。柄には銀の細工があしらわれ、先端には真紅の水晶が埋め込まれている。

「ただのナイフじゃないんですよぉ。実はこれ……こう見えてデバイスなんです」

「これ……デバイスなんですか？」

フィニーノの言葉にランスターが驚いたように口を開く。

「そう。雄大さんは何時もナイフが主武装だからそのタイプのデバイスを作ろうと思って苦労に苦労を重ねた結果完成した一品。ただ

サイズの関係もあってカートリッジは最大装填数三発までなんだけどね」

フィニーノの言葉を聞きながら、自然とナイフ型のデバイスを手に取る。鞘を抜くとそこには銀ではなく、真っ黒にそまった刃が光に反応して鈍く輝いている。

柄を一、二度握り直す。刃の腹をなぞる。水晶を光に透かす。

そして、また身体が震えた。

間違いない俺は既にこれを“知っている”。

「フィニーノ……これ何処で手に入れた」

「えっ？　何処でって……作ったのは私達メンテスタッフですから何処でと言われても」

「なら、質問を変える。これの“元”になった物は何処で手に入れた」

困ったように言い淀むフィニーノを見て確信する。

「俺のだ……」

俺の呟きに全員が驚いたような顔をする。それにかまわず俺は続ける。

「このナイフ……俺のなんだよ」

――そう、このナイフ型のデバイスはかつて俺が所持していた物なのだ。

最初は何かの見間違いかと思ったが、身体は直ぐに反応していた。それに刃が黒いナイフ等これぐらいしかない。

最後に使ったのはあの時。奴とあちらの世界で殺し合った時だ。

あの時、俺はこれを地面に放りっぱなしにしてあったはずなのに何故……

「えっと……前にデバイスの予備パーツを保管してある倉庫を漁ってたら、そのナイフが知らない間に紛れてて……それを見たから雄大さんのデバイスを作ろうと思い立ったんですけど、あっ、ちゃんと許可は取りましたよ！　決して無断で刃物を隠して改造してた訳

じゃないですから」

フィニーノの説明にこれが俺の手に渡る経緯は分かった。しかし、どうやってこいつは世界と世界の次元を越えてきたのか。

その辺りがどうもすっきりしない。考えようのない事だから仕方ないのかもしれないが……

「いや、まぁ責めてる訳じゃないし、ただこいつがあった事に驚いただけだから……」

そう言いつつ刃を鞘に収める。黒く光っていたそいつはその輝きが嘘のように元の黒いだけのナイフに戻る。

「あのシャーリーさん」

「ん？　何？」

そんな何とも言えない雰囲気の中ナカジマが口を開く。

「私達のデバイスは
待機状態で持ち運びしやすい形になってますけど、このデバイスは

さっきからずっとこの状態のままですよね？　私達みたいにペンダントとかにはなったりしないんですか？」

ナカジマの言葉にフィニーノが首をひねる。

「う～ん、それがね。デバイスの待機状態の機能も入れようとしたんだけど、デバイスの基本的な機能とカートリッジシステムを組み込んだ時点でちょっとおかしくなっちゃって……」

「おかしくなった？」

ランスターが聞き返す。

「うん。最低限の機能を付属させた瞬間、システムを組み込む系統の操作が全てエラーになっちゃって……」

長い間デバイスに関わってきたけど初めての事だよ、とフィニーノは苦笑いする。

「まぁ、最低限機能すれば十分だよ。ありがとう、フィニーノ」

「いえいえ、じゃあ使い方の説明を――」

そう言って、フィニーノがモニターを操作し始めようとした瞬間だった。

まるで馬のいななきの如く甲高い音が施設内に響き始めた。その音に呼応するかのように部屋にある無数のモニターが赤に染まる。

その赤の中央に大きく鎮座する『ＡＬＥＲＴ』の文字。

「このアラートは……！」

「一級警戒体制！」

ナカジマとモンディアルの言葉に全員が真剣な眼差しでモニターを見つめる。

「グリフィス君！！」

なのはの言葉に応え、モニターの一つに眼鏡をかけた水色の髪が特徴的な青年が映る。

この男――グリフィス・ロウランは部隊の副部隊長を努めるエリート管理局員だ。フォワード陣や各隊の隊長、副隊長がほとんど女性で何かと女性比率の高い機動六課において、数少ない重要ポストについている男性である。

全くの余談だが、六課内の男性の比率が低い事も相まって、ロウランとは直ぐに打ち解ける事が出来た。

さすがに何でも話し合えるなんていう仲ではないが、普通の友人としては何の差し支えもないだろう。

そんな事を考えている間に、モニターにはフェイトとはやての顔も映っている。

話を聞くかぎり分かった事は、機動六課の直接的な理由である探索中の古代遺失物――ロストロギア『レリック』らしき物が見つかった事。

さらにそのレリックはリニアレールに積まれており、レリックに引かれ、何処からか表れる戦闘マシーン『ガジェット』がそのリニアレールを占拠しているという事。

レリックやガジェットの事は俺も管理局に入ってから知ったが、そ

の用途や製造元、ガジェットの目的は未だ解明されていないらしい。

はっきりしているのはレリックは放置出来ない危険性を秘めた物であり、ガジェットは管理局以外にそんな危険物を回収しようとしている部外者及び集団の刺客であるという事。

そして、その部外者が奴である可能性は捨てきれない。

なら、俺の成すべき事は簡単だ。

管理局員としてレリックの回収や探索に参加する。そして、奴がその裏にいるのなら居場所を見付け、炙り出し、今度こそ殺す。

たったそれだけの至極単純な行動。

それにもし奴がこの世界にいないとしても、この件に関わっていれば、俺はこの世界の魔法を新たな力として蓄えられる。

何にせよマイナスには転ばない。だったら、俺は俺で最善を尽くさせてもらおう。

『ほんなら……機動六課フォワード陣出動！』

モニター越しのはやての言葉に全員が返事をして、各々自分のデバイスを引っ掴み部屋を後にする。

「あっ、雄大さん！」

「ん？」

俺もこの世界の形に変化した自らの愛器を持ち、部屋を後にしようとした時、フィニーノに呼び止められる。

「これどうぞ。そのデバイスは形が変えられないですけど、これなら何時も携帯出来ます」

そう言って、フィニーノが渡してきたのはナイフをしまう事が出来るホルダーだった。ベルトに装着出来る型で銀の止め金がストラップのように揺れている。

「おぉ……これはありがたいありがたい。さっそく使わせて貰いますよ」

軽い感じでそう答え、ホルダーを受け取り、ベルトに装着してからナイフをそのホルダーに固定する。

「うし、じゃあ初出動張り切って行きますか」

自身を鼓舞する意味も込めて両手で頬を叩き、真新しい愛器と共に部屋を急いで後にした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5798i/

魔法少女リリカルなのはStrikers―仮面の復讐者―

2010年10月11日08時19分発行